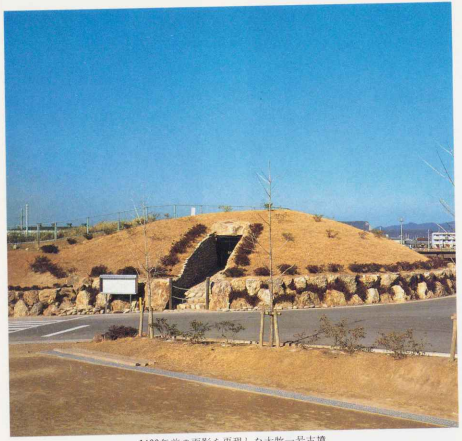
古墳は語る

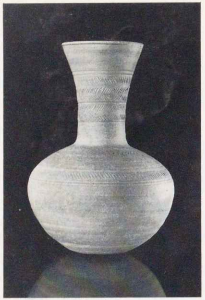
大牧一号古墳

各務原市立陵南小学校

上空からみた陵南小校下・昭和60年２月



1400年前の面影を再現した大牧一号古墳



長頸壺

甕

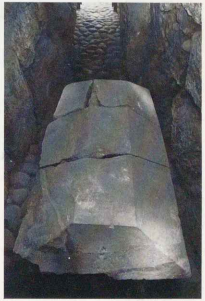
脚付短頸壺

高杯（長脚二段）

羨道部

玄室の天井部

家形石棺

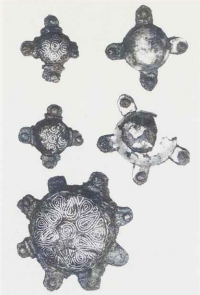


玄室内部

古墳は語る

大牧一号古墳

各務原市立陵南小学校



雲　珠

鉄　鏃

轡

挂甲の小札

発刊によせて

各務原市長
平野喜八郎

麗しい自然、あたたかい人情。文化財にめぐまれた教育的風土。

その素晴らしい環境の中に、陵南小学校が地域の人々の願いのもとに“古墳のある学校”として開校して一年になります。

特色ある教育環境、教育条件が各方面から注目され、大きく羽ばたいている矢先「古墳は語る」―大牧一号古墳―を発刊されたことは時宜を得た壮挙であり、大変嬉しいことです。

本当におめでとうございます。

緑山清溪の豊かなこの郷土とその歴史を知ることは、自ずから、郷土に対する愛情と責任をもつことであり、祖先を敬愛し、先人に学びながら、より豊かな生活の実現を願うことであります。

「古墳は語る」発刊の意味もそこにあると思います。

校門の入口に現状保存されている“大牧一号古墳”は、県下でも比類ない貴重な埋蔵文化財であります。

校地内に名立たる古墳が存在し、その古墳を基点としてふるさと意識を高揚できることは、陵南小学校にとって誇りであるばかりでなく、わが各務原市にとっても貴い宝物であり誇りうるものであります。

本書の刊行にあたり、ご尽力下さった山腰校長先生をはじめ諸先生に、心から敬意を表し、感謝を申し上げる次第であります。

本書が広く愛読されて、郷土の歩みと先人の心を心とした輝かしい未来のある地域づくり・希望と活力のある学校づくりの、その指針となることを祈り、さらに前進し続ける陵南小学校に心からなる拍手をお送りいたします。

発刊によせて

各務原市教育長
水野定之

広くて豊かな各務野の南、眼下に木曽川を望む丘に陵南小学校がある。この学校の校地の中に千古の歴史を秘めた古墳があり、「大牧一号古墳」と名づけられ、ていねいに保存されている。

今回、同校の先生方のお骨折りによって、「古墳は語る」というこの書物が発刊されることになった。いい仕事をしてくださったとたいへん喜んでいる。

私は教育という仕事は「文化の伝承と創造」であると思っている。日本人が何千年もかかって創り上げてきた日本の文化を教えられ、学びとり、自分のものにし、やがて又その上に新しいものを構築していく。この営みが教育であろうと思う。このくり返しを人間の歴史の発展といってもいいかもしれない。

この陵南小学校に学ぶ子どもは、これから何千人、何万人を数えるであろう。それらの子どもたちは、千数百年もの昔にこれだけの墳墓を造営した祖先の文化のすばらしさをここから学ぶだろう。もの言わず静かに眠るこの遺跡が教えてくれるものは偉大である。

さらに子どもたちに、先人の偉業への畏敬の念を育てるとか、祖先の方々の立派さに対する誇りをもつとか、郷土への愛着の心を培うとか大きな生きた教材であるとも言い得よう。

この書物はそういう教育への手引書である。有効に活用され、地域の教育的風土を育て、すばらしい教育の展開を期待してやまない。

校門を入った左手の北西角に六世紀末の古墳が現状保存されている。これは、私たち陵南のシンボルであり、誇りでもある。

また、地域の貴重な文化財であり、宝物である。

この古墳の存在は、学校と地域との連帯感や一体感を強めるばかりでなく、歴史的事実の学習は勿論のこと精神的にも大きな支えとなっている。

こうした素晴らしい環境を生かして、"豊かであたたかい思いやりの心"を持つ子どもをどのように育てたらよいか、ということが開校当初からの課題であった。

"豊かであたたかい思いやりのある子"を育てるために、日常生活の中で、人間愛や自然愛といった"思いやりの心"を育てると共に子どもたちが生活している学校や郷土の歴史や文化を理解し、みんなで護り育てるような風土を醸成することが大切である。

こんな願いから、先ず、私たちがこの"大牧一号古墳"の遺産を中心に、その時代背景や人々の生きざまを想像することはとても意義あることだと思います。

具体的には、この冊子の発刊を通して次のことを願っています。

○貴重な文化遺産である"大牧一号古墳"をより多くの人々に紹介することによって、この地に住みつき、栄々と高い文化を築いてくださった祖先の偉大さを知り、その時代のものの考え方・感じ方を学び、文化遺産の理解に役立てる。

○地域の古墳を学ぶことにより、ふるさとの再発見と郷土の歴史や文化財を身近かなものに感じ、ふるさと意識を高めると共にふるさとへの愛情を深める。

○先人が遺した古墳を愛護・継承し、祖先への感謝・尊敬・崇高・畏敬といった心情陶冶に役立てる。

○この地に生まれ育った人々と故郷はちがっても、この地をえらび定住し、ふるさとにしようとする人々とが力を合わせて、あたたかい思いやりの心と郷土を愛する人づくりに役立てる。

はしがき

各務原市立
陵南小学校長
山腰時安

以上のようないくつかの想いをもとに、ひいては、地域の教育力と教育を大切にしようとする風土を育て"あたたかい心"の通いあうような連帯感にみちた郷土づくりと発展に寄与したいと考えています。

最後になりましたが、この冊子発刊に際して、終始ご指導いただきました市教育委員会の方々、親身になって応援いただいたＰＴＡ、広報会、老人会の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

目次

発刊によせて　各務原市長　平野喜八郎……ii

発刊によせて　名各務原市教育長　水野定之……iii

はしがき　各務原市立陵南小学校長　山腰時安……iv

第一章　古墳時代とは……1

一、古墳出現の背景……2

(一)稲作のはじまり……2

(二)貧富の発生と階級の成立……3

(三)ムラからクニへ……4

(四)大和国家の成立……5

(五)大和国家の伸展……6

(六)大和「古墳」時代の社会構成……7

(七)縄文・弥生時代における信仰・墓制の推移……7

二、古墳時代とその推移……10

(一)古墳の発生……10

(二)古墳の推移……12

第二章　岐阜県の古墳……19

一、美濃のクニグニの成立と豪族……20

二、岐阜県の古墳……24

(一)三五〇〇基の古墳分布……24

(二)県内の代表的な古墳……26

三、古墳文化の展開……30

第三章　各務原市の古墳……35

一、古墳分布とその特徴……36

二、特色ある古墳……39

三、市内に残る古墳……42

四、ウヌマ勢力とナカ勢力……46

第四章　大牧一号古墳……51

一、地勢と地域的特徴……52

二、鵜沼古墳群と大牧古墳群……54
三、大牧一号古墳……57
(一) 古墳の現状と周囲のようす……57
(二) 発掘の経過……64
(三) 遺構のようすと特色……69
① 構造……69
② 横穴式石室……72
③ 石棺……77
④ 羨道・前庭部・墓道・周濠……84
四、出土遺物……92
① 須恵器……92
② 鉄製品……95
③ 馬具類……98
④ 装身具……100
(四) 被葬者と農民のくらし……102
第五章　結語……107
付・挿入図版出典一覧……113
あとがき……118

第一章　古墳時代とは

一、古墳出現の背景

古墳時代と呼ばれる時代は、考古学的には、弥生時代に続く古代国家の形成期をさしている。古墳時代の人々の社会生活及び精神生活は、いうまでもなく前時代、すなわち弥生時代から形づくられてきたものであり、古墳時代を語るためには、どうしても、弥生時代から話を進めなくてはならない。

したがって、弥生時代、とりわけその時代の社会生活の特徴である稲作のはじまりから稿を進めることにする。

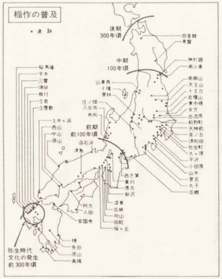


図1　稲作の普及

(一)　稲作のはじまり

紀元前三～二世紀頃になると、西日本の方から、人々は新しい土器（弥生式土器）を作り始めた。出土したこの土器には、しばしば種籾のあとや焼米が付着しており、人々が水稲耕作を始めたことを物語っている。その最初は、北九州の人々であった。水稲耕作は、東南アジアまたは朝鮮、特に後者から伝わったであろうといわれる。確かに北九州には、朝鮮の墓制と同じ支石墓が認められ、弥生式土器が最も早く作られ始めた。

水稲耕作は、一世紀ほどの間に愛知県知多半島の辺りまで伝わり、下北半島まで到達するのに四〇〇年の時間を必要としただけであった。この速度は、今の感覚では随分遅いように思われるが、縄文時代までの歴史の動きはほぼ一〇〇〇年を単位としていると言われていることから考えると、四〇〇年という時間がいかに速いものであったかがわかる。当時の日本列島の人々が、いかに喜んで水稲耕作を受け入れたか、容易に想像できる。

水稲耕作を始めたからといって、人々は、それまでの狩猟・漁撈を全くやめたわけではない。しかし、人々が移したことは決定的なことであった。生産の基礎を稲作という生産経済に移したことは決定的なことであった。縄文時代とは比較にならないほどの生産力の上昇がもたらされ、同時に、

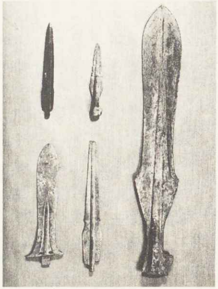


写真2　右　広鋒銅鉾　中上　銅鉾、中下　銅剣　左上　細形銅剣　左下　銅戈

写真1　銅鐸
兵庫県桜ヶ丘出土

水田造成に有利な場所を求めて集落の移動も始まった。つまり、今まで台地や海岸線にあった集落が、農耕に適した平野部に移ったわけである。この時代の集落の様子は、静岡県の登呂遺跡に見ることができる。

この農耕文化は、稲の他にもう一つ重要な文化要素を日本列島にもたらした。それは金属器の導入である。弥生時代に登場した金属器は、青銅器と鉄器であり、その用途は、農具・工具・武器・祭祀用具等である。これらの金属器は、生産力のみならず人々の精神生活の向上にも重要な役割を果したたろう。祭器・宝器として使われた銅剣・銅鉾・銅鐸・銅鏡等が、この時代の人々の精神生活を象徴している。

(二)　貧富の差の発生と階級の成立

農耕の開始はまた、各集落（ムラ）の内部を大きく変化させた。ムラを構成する各家族の間に貧富の差が生じたことである。

農耕は、水利など特にムラ全体で共同して行う仕事を別にして、基本的には各家族単位で行ったため、当然多人数の家族のほうがより多くの収穫を得ることができたのである。収穫した米は、長期間の貯蔵が可能であった。ここに財産（米の貯蔵）の差が生じたのである。

貧富の差は、やがてムラの中に階級を成立させたと考

「後漢書」朝鮮から東南へ行った広い海に浮かぶ島にすんでいて、一〇〇余国の国に分かれている。後漢のころ、倭の中の奴という国から使いが貢物を持ってやってきた。皇帝は、奴国の王に位を授け、そのしるしとした。

「魏志」倭人伝（部分要約）

倭人の男は、幅の広い布を結び合わせて服とし、女は大きな布の中央にあなをあけ、そこから首を出して着ている。稲や麻を植え、蚕を飼っている。はだしでくらし、食物を手づかみで食べる。人々から取り立てた税は、大きな倉庫に納められている。身分の低い者が身分の高い者に道であえば、あとずさりして道端の草むらの中にひざまずく。

もとは男の王であったが、諸国が共同して卑弥呼を王にたてた。卑弥呼はまじないをして、人々を引きつけるふしぎな力をもっている。宮殿にこもって人々の前にはほとんど姿を見せず、千人の女の召使いを置いている。卑弥呼は、魏の朝廷に使いを送り、倭の王という称号や金印を授けられた。卑弥呼が死ぬと、大きな塚がつくられ、百人あまりの奴隷がいっしょにうめられた。

えられる。また、治水・灌漑などの水利を中心として、いくつかのムラが結合し、水の各ムラへの分配などを決める指導者が出現した。こういった指導者や祭祀を行う司祭者の中から首長といえる支配者も現れ、ムラは政治的結合に基づく共同体へと発展していったのである。

(三) ムラからクニへ

政治的に結びついた共同体として首長に統率されたムラは、周辺地域の他集団との闘争や、その併合を通して、より大きな集団（クニ）となっていったと考えられる。

例えば、一つの川の流域では、米作りの普及、技術の進歩とともに、水利・水防のために連合協力する必要が生じたことであろう。また、逆に力関係に不均衡が起こった時、そこに抗争が発生することもあろう。山口県下関市の土井が浜遺跡の弥生式墓地から、中年の男性の遺体が出たが、その全身に十数本の石の矢じりがつきささっていた。おそらく、抗争の中で死んでいったムラの英雄なのであろう。

このようにして、一つの川の流域全体が一つにまとまれば、実力のあるムラの長がその連合の長となったことであろう。そうなると、それはもはやクニである。そうしたなかでクニの長は、弥生時代の終わり頃（紀元二〇〇年頃）になると、小さなクニの王といわれるようになり、

それにつれて墓もりっぱになっていった。この頃の日本の様子は、中国の古い書物である『後漢書』東夷伝に書かれている。（四頁参照）

弥生時代の中期から後期になると、中国の史書に日本の「国」と「王」が登場し始めている。この文献に書かれている分立した一〇〇余国や奴の国、さらにのちの邪馬台国（三世紀頃）なども、こうして形成されていったクニの一つであったと考えられる。

邪馬台国に関しては、その存在場所等について江戸時代から論議され諸説があるが、ここでは言及しない。この当時（三世紀頃）の日本の様子を伝える『魏志』倭人伝を参考までに載せておきたい。（四頁参照）

(四) 大和国家の成立

八世紀に成書化された『古事記』と『日本書紀』に、大和国家成立に関する次のような物語が記されている。すなわち、天孫ニニギノミコトが高天原から九州日向の高千穂峰に降臨し、そこに長くとどまった後、カンヤマトイワレビコの代に至って日向から大和への東征が行われた。やがて、イワレビコは大和を平定し、橿原宮で初代の天皇（神武）として即位した。その後、崇神による大和の神々の祭祀と四道将軍の派遣、ヤマトタケルによる西征と東征、成務による国造（くにのみやつこ）・県主（あがたぬし）などの地方官位命、神功による新羅征討などが行われて、次第に国土は統一され、発展していった。さらに『書紀』によると、神武の即位した年は、紀元前六六〇年の辛酉であったという。

しかし、こうした物語をとうていそのまま信じるわけにはいかない。断片的には史実が含まれているとしても、全体としては政治的色彩がきわめて濃厚であって、こうした神話・伝説の類から四世紀の状態を探ることは、かなり困難だといわねばならない。

したがって、四世紀の日本の状況を把握するためには、どうしても中国の史書に頼らざるを得ない。

『古事記』『日本書紀』に残された記述と、中国の史書にある記述から、およそ次のことが言えると考えられる。

「宋書」の「倭国伝」には、宋の武帝の四二一年に、倭王讃が通貢しているとの記載がある。倭王讃は、仁徳天皇に該当するものと考えられる（魏の卑弥呼とする考え方もある）。

また、高句麗の広開土王碑には、辛卯の歳に倭が海を渡ってきたり、百済、新羅等を破って臣民と為したという文がある。辛卯の歳は三九一年とみなしてよい。この倭は当然統一国家の成立した後のものであろう。そうすると、三世紀の後半のある時期から四世紀の間に、日本は小国家の分立から統一国家へと発展したと考えられる

表1　大和国家の推移と天皇

世紀	天皇		世の中の様子	古墳
3	10	崇神	・このころ大和国家が成立	前期古墳
4	15 16	応仁	・広開土王碑の文(391年) ・宋の武帝に通貢(421年)	中期古墳
5	17 18 19 20 21	履仲 反允 安康 雄略	倭の五王と考えられる。(諸説があり定説ではない。)	
	25	武烈	・大和朝廷の力が全国へ広がる ・政治の組織が整ってくる。	後期古墳～消滅
6	33	推古	(大牧一号古墳) ・聖徳太子の政治。	
7	38 40	皇極 孝徳	・大化の改新(645年) ・薄葬令(646年)	

のである。

三世紀後半から四世紀という時期はまた、古墳発生の時期でもある。前方後円墳を有する古墳文化は、まず畿内を中心として発達した。多くの副葬品を収める厚葬思想に基づく墳丘の点在は、天皇を中心とした大和朝廷が畿内で成立し、各地に勢力を伸展させたという歴史と密接な関係があることも指摘できる。

さらに、真福寺本の『古事記』には、ハツクニシラス（崇神天皇）が戊寅の年に崩したという注記がみられる。この年紀を信じれば、崇神天皇の在位は三世紀後半もしくは四世紀の初頭にあたり、畿内大和に古墳文化が発生した時期もほぼ一致するのである。（崇神陵は四世紀初頭の古墳として奈良県に現存している）

以上のことから、遅くとも四世紀の前半の頃に統一国家が成立し、大王（おおきみ）が立って政治的支配の中心となり、その周辺には多くの貴族や豪族が権勢を持っていたものと考えられる。

(五)　大和国家の伸展

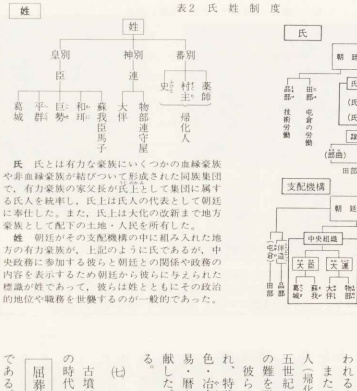
四世紀前半に統一国家として成立した大和朝廷は、次第に発展し、地方に対する勢力もまた伸展した。

五世紀に近づく頃には、海を渡って南鮮に兵を進めるような大きな実力が養われてきた。

五世紀前半の頃まで、応神天皇・仁徳天皇が治め、その後、履中天皇から反正・允恭・安康・雄略の各天皇へと続いた。中国の史書にある「倭の五王」の時代である。この頃、社会機構も整い始め、政治的な支配形態も、東北地方は仙台平野まで、九州地方は大隅地方まで拡大された。

六世紀になると、政治の組織も次第に整い、国々におかれた国造や県主も充実し、整備されていった。

表2　氏姓制度



氏　氏とは有力な豪族にいくつかの血縁豪族や非血縁豪族が結びついて形成された同族集団で、有力豪族の家父長が氏上として集団に属する氏人を統率し、氏上は氏人の代表として朝廷に奉仕した。また、氏上は大化の改新まで地方豪族として配下の土地・人民を所有した。

姓　朝廷がその支配機構の中に組み入れた地方の有力豪族が、上記のように氏であるが、中央政務に参加する彼らと朝廷との関係や政務の内容を表示するため朝廷から彼らに与えられた標識が姓であって、彼らは姓とともにその政治的地位や職務を世襲するのが一般的であった。

(六)　大和（古墳）時代の社会構成

大和時代の国家のしくみは、「氏姓制度」と呼ばれる独特のもので、皇室を中心に姓をもった多くの氏が政治を分担していたしくみで、七世紀の中頃の大化の改新が行われるまで存続した。（上表）

また、大陸との交渉が多くなるにつれて、多くの渡来人（帰化人）が日本に移り住むようになった。四世紀から五世紀の後半にかけて、朝鮮半島では紛争が激化し、その難を避けるため多くの技術者が日本に帰化している。

彼らは、来日してからそれぞれ集団で居住地を与えられ、特殊技術によって朝廷に奉仕し、わが国に織物・染色・冶金・土木などの技術を伝え、一部は儒教・医術・易・暦などの中国の学問を伝え、日本の文化の向上に貢献した。古墳造りの技術も彼らから多くを学んだのである。

(七)　縄文・弥生時代における信仰・墓制の推移

古墳以前にも、人々は墳墓を造っていた。それは、その時代の人々の信仰と深い関があった。

屈葬の持つ意味

縄文時代人が死というものを恐れていたことがうかがえるのが屈葬である。屈葬とは、死者の手足を折り曲げて埋葬するこ

表3　縄文～弥生時代の信仰・墓制の推移

	縄文時代	弥生時代
時期	B.C.8～7000からB.C.3～2世紀ごろまで	B.C.3～2世紀からA.D.3世紀ごろまで
信仰	縄文時代人は自然物に大きく依存する生活を営み、自然に左右される面が多かった。そのため彼らは、自然そのものやすべてに精霊が内在すると考え、これを崇拝する自然崇拝の念を持っていたと思われる。（アニミズム）	農耕に従事した弥生時代人にとって最大の関心事は、稲の生育に欠かせない水と太陽だった。そのため、水と太陽を人間の思いどおりに支配し、豊かな収穫をあげられるように呪術や農耕儀礼を行った。
埋葬法	屈葬　死者の四肢とくに下肢をおり曲げて埋葬する縄文時代の普遍的な葬法。 抱石屈葬　一部には、死者の胸部に石をのせた葬法が確認されている。 甕棺葬　後・晩期に盛行するが、遺在骨からみて多くは幼小児棺と考えられる。	伸展葬　死者の両脚を伸ばして埋葬する葬法。 甕棺葬　甕を棺としたもので、成人の遺骸を納めるため2つの甕を組み合わせたものもある。北九州に多い。 箱式石棺　石板を並べ合わせて棺としたもので、北九州を中心に見られる。
墓制	土壙墓　死者を埋めた上に土を盛り上げたもの。 組石を環状にめぐらした環状列石が東日本に多い。 特定の墓域はなく、副葬品にも差はない。	支石墓　箱式石棺・甕棺の上に目印となる大きな石をのせた墓。朝鮮半島から北九州に見られる。 方形周溝墓　地表から多少掘り下げた墓穴の周囲に方形に溝をめぐらした墓。古墳とのつながりが注目される。

とをさし、中にはさらに石などを胸に抱かせたものもある。つまり、死者の霊が遺骸からさまよい出て自然界や人間の世界に災いをもたらすことを避けるために行ったと考えられる。

伸展葬への移行

死者の両脚を伸ばして埋葬する葬法を伸展葬という。弥生時代の人々は、縄文時代人の考え方とは異なり、死後の世界を現実の世の延長とする考え方を持つようになったと考えられる。その表れが、伸展葬である。

単純に直接遺骸を地中に埋めるだけで特定の墓域も設けなかった縄文時代の墓制と違って、弥生時代には棺を作ったり、特定の墓域を設けたりするようになった。北九州を中心に墓域の発展がみられる。

墓制の推移

また、死者にそえて墳墓に葬った品物（副葬品）にも変化がある。縄文時代には、死者が生前身につけていた玉や耳飾りなどの副葬品があるが、これらの副葬品間における差は見られない。しかし、弥生時代になると、副葬品も生前身につけていたものの他に、銅剣・銅矛・銅鏡などが確認されている。そして、副葬品の差が明らかになってくる。すなわち、貧富・階級差の発生が、副葬品にも反映してきたのである。

写真3　屈葬

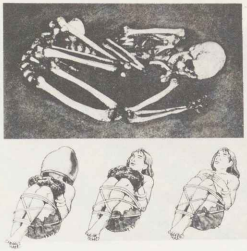


写真4　甕棺葬

頭の部分に、深鉢をかぶせます。

大きな石を、胸の上におきます。

足をおり曲げて、ひもでしばります。

方形周溝墓

弥生時代後期から古墳時代にかけて、各地に「五～一〇メートル四方ごとに区切りをめぐらし、もり土をした真ん中あたりに長方形の穴をほって遺体をおさめた墓があらわれました。

この方形周溝墓には、むらやくにんのかしらなど、特別の人がはうむられたと考えられています。

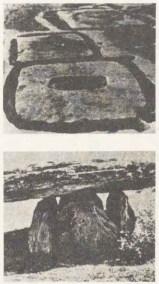


写真5　方形周溝墓と支石墓

支石墓

弥生時代に、北九州地方には、大きくて平らな石を、数個の石でささえ、その下にかめ棺や石室をおいた墓がつくられました。これは支石墓とよばれ、朝鮮半島の南部にも見られます。おそらく、南朝鮮で行われていたものが、伝わったのだと考えられています。

二、古墳時代とその推移

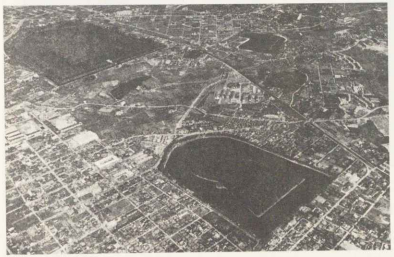


写真6　広壮な履中陵(手前)と仁徳陵(左奥)

「古墳とは何か」を定義づけ、「古墳の発生はいつか」ということについては諸説があり、明確に決定することは難しい。いうまでもなく、「古墳」は墳墓であり、遺骸を埋葬した施設であるが、縄文時代や弥生時代の埋葬施設は「古墳」とはいわずに主として「墓」と表現している。また、古墳時代の終末の頃から行われ始めた火葬の場合も「火葬墓」と「墓」を用いている。

とにかく、古墳の定義は明確ではないが、少なくとも「墓」と「古墳」という用語の区別は、墳丘の形式や内部構造をはじめ、その時代や社会的、政治的、思想的背景を含めての相違を示しているのである。古墳の一般概念としては、封土を築き、棺槨を設け、遺骸を埋葬すると共に副葬品をも納めた施設をさす、といえよう。

古墳は、概観的には、三世紀ないし四世紀初頭に出現し、約四〇〇年間を経過して、七世紀ないし八世紀初頭に消滅するものと考えられ、この時期を考古学上、古墳時代と呼んでいる。

(一)　古墳の発生

わが国には、大小の古墳が約十五万基以上存在するといわれているが、古墳がいかなるプロセスで出現してきたのか正確には解明されていない。

弥生時代の終末期には、族長墓としての方形周溝墓や

方形台状墓と呼ばれる墳墓が確認されているが、これらの墳墓ははとんど副葬品がなく、墓前祭用と推定される土器がおいてあるにすぎない。これらの墳墓が、ある集団の一部の人々を特別に埋葬したものであったとしても豊かな副葬品と手のこんだ内部構造の構築、あるいは個人のために独立した大墳丘を築く古墳とは、本質的に性格が異っている。

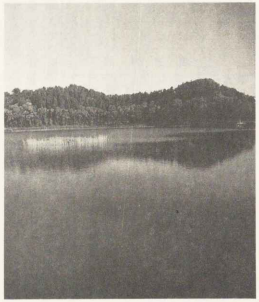


写真7　箸墓(奈良県)卑弥呼と同一人物説もある倭迹迹日百襲姫の墓かといわれている発生期の古墳。前方後円墳、全長二七〇メートル。

また、弥生時代の最終末期において、土壙墓の周溝墓と、多数の中国製の鏡を有する石室のある前方後円墳が極めて近距離に並存している例がある。しかし、両者は時期が極めて近接しているにもかかわらず、内容や性格には大きな差異が認められるのである。

前にも述べたように、数々の小国家が大和国家へと統一されていく社会背景の中で、国家の首長である主の大きな墳墓が築造されていくようになった。そして、その墳墓が三世紀後半から四世紀初頭にかけて、前方後円墳として畿内を中心とする西日本の各地に突如として現われるのである。これが古墳の出現である。

しかし、この前方後円墳の起源についても、多くの研究者によって考察が重ねられてきたが、今だに定説をみるに至っていない。ただ、現在のところ、それはわが国独自の古墳形式であるといえそうである。最近では、朝鮮半島や中国にも存在するという説もあるが、その影響でわが国の前方後円墳が成立したと考えられるような資料はないのである。大規模な前方後円の墳形を持った古墳が、次第に発達して出現したものなのか、最初から定型化した形態でここに初現したのか、という問題もまた、今だ明確ではない。一般的には、弥生時代の円形周溝墓や方形周溝墓が発展して前方後円墳に至ったと考えられている。

(二) 古墳の推移

古墳は、およそ四〇〇年間にわたって築造されているが、その間、古墳の規模や内容・性格は一様であったわけではない。時代推移とともに、古墳も変化していく。古墳の推移を年表として表し、それぞれの時期の古墳の特徴を説明すると次のようである。

表4　古墳年表

	紀世四			紀世五	
	墳古式古			墳古期（盛）中	
	墳古期前			期Ⅲ前	期Ⅳ前
	期Ⅰ前	期Ⅱ前			
古墳の編年					
古墳の外形	前方後円墳 前方後方墳 円・方墳の出現？	前方後円墳 前方後方墳（定形化） 円・方墳埴輪 （器材埴輪）		前方後円墳の縮小化 造り出し 陸墓の出現 方・円墳の盛行 埴輪の増大	前方後円墳 前方後円墳の減少 円・方墳 器材埴輪の減少
内部構造	竪穴式石室 割竹形木棺 組み合せ木棺	枯土槨 割抜式木棺 組合せ式木棺 竪穴式石室 割竹形石棺 舟形石棺		粘土槨の普及 竪穴式石室 長持形石棺	
副葬品	鏡・玉・武器・生産用具・碧玉製腕輪 鏡・鍬鋤（後漢〜三国） 鍬形石・車輪石・石釧・筒形銅器	鏡・玉・武器・防製 鏡の増加・碧玉製腕輪の盛行 筒形銅器の出現		鏡・玉・武器の副葬 武器・甲冑の副葬 鏡の減少・南朝系 「画文帯神獣鏡」 石製模造品の多量化	鏡の副葬更に減少 金銅装馬具の普及 須恵器の副葬
主要な古墳	京都　椿井大塚山古墳、南原古墳 奈良　天神山古墳 岡山　車塚古墳	佐味田宝塚古墳、静岡　松林山、三池平古墳・天理　東大寺山古墳、和泉黄金塚 会津塚古墳　福岡　銚子塚古墳 三重　石塚山古墳 岡山　金蔵山古墳	桜井茶臼山古墳 奈良　日葵酔鏡塚 大阪　紫金山古墳	御所宝塚大墓「宮山古墳」、佐紀古墳群、乙訓古墳群、百舌鳥古墳群、果塚山古墳、応神陵・履中陵・黒陵古墳、野中古墳群、久津川古墳、京都　久津川古墳、岡山　造山・作山古墳、宮崎　西都原古墳群・月輪古墳	和歌山　大谷古墳 大阪　塔塚・大谷・芝山古墳 岡山　船山古墳・長持山古墳 熊本　船山古墳

	紀世六	紀世七	
	墳古期後		
	墳古期後		
	期Ⅰ後	期Ⅱ後	期Ⅲ後
古墳の外形	前方後円墳の縮小 群集墳　新の出現 和泉負塚 兵庫　歌山　橋千塚 阪　陶器　山古墳　古墳群 信太	古墳築造量の増加 群集墳の盛行 （大化薄葬令）	火葬の出現
内部構造	横穴式石室の普及 木棺直葬 家形石棺の普及	横穴式石室 刳抜式家形石棺 横穴墓の盛行 陶棺の出現	群集墳の消滅
副葬品	鉄製農工具の減少 須恵器副葬の普及 馬具の副葬の普及 全銅製装身具	須恵器・土師器の副葬盛行 武器・馬具の盛行 銅鏡 銅鈴 須恵器・土師器の副葬 馬具の盛行 銅鏡 銅鈴 金銅製馬具の普及 須恵器の副葬	横穴式石室への追葬 縛綿式石室 横口式石槨 夾紵棺
主要な古墳	桜井二塚古墳、西乗鞍、東乗鞍 天理　別所大塚古墳 当麻　二塚古墳 新庄　平古墳 宣化陵　欽明陵 見瀬丸山古墳 福岡　岩山古墳	石舞台古墳、都塚古墳、岩屋山古墳 珠洲　西古墳 用明陵、赤坂天王山古墳 群馬　観音塚古墳 岡山　箭田大塚古墳	天武・持統陵 聖徳太子墓 牽牛子塚古墳 玉類・金環などの装身具の減少 刀などの武器 鬼の雪隠・鬼の俎 高松塚 中・尾山古墳 群馬宝塔・山ノ上古墳

前期古墳

四世紀代の前期古墳は、神にかわって国を治めるという司祭者的性格をそなえた者が被葬者であった。したがって、古墳の内容は呪術的側面が強く、化粧道具ではなく除魔としての宝器類の所有と副葬が顕著になっている。玉類・碧玉製の装飾類など非実用として存在した。埋墓は丘陵の自然地形を利用して宝器として存在した。埋墓主の休部として粘土槨あるいは竪穴式石室が構築された。

日本最古の大古墳は、京都府相楽郡椿井の「大塚山古墳」であろうと推定される。丘陵の先端を利用して造り竪穴式石室を設けた八角形の前方後円墳で、この古墳から中国の魏で製作された三角縁神獣鏡が二四面出土している。これらの鏡は、邪馬台国の卑弥呼が魏の明帝から下賜された銅鏡一〇〇枚の一部と推測される。同笵鏡は北九州から関東に分布しており、大塚山古墳の被葬者が三角縁神獣鏡を各地の王に分与し、積極的に同盟関係を結んだのであろうと推測できる。

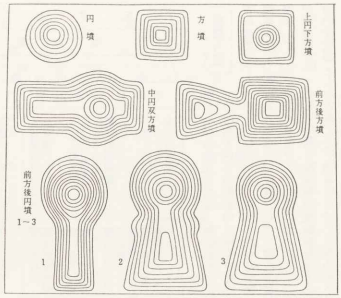


図2　古墳の外形のいろいろ

・前方後円墳　祭壇と考えられる
・前方部　埋葬主体部
・後円部

中期古墳

五世紀の中期古墳は、巨大な古墳の時代で造墓のピークの時代である。この期になると、自己の権威を他に誇る支配者としての意図が明白である。周濠を持ち、墳丘には埴輪を樹立し、主体部も竪穴式石室に豪壮な長持形石棺を納め、鏡・玉・刀剣のほかに、甲冑や馬具、石製模造品などの副葬品が顕著になる。ことに金銅装の遺物や、埋葬のために実物を模して作られた滑石製の遺物が増大する。わが国最大の規模を持つ応神陵や仁徳陵（両方とも前方後円墳）は、この時期を代表するものである。また、円墳や方墳も盛んに造られるようになった。

前期から中期にかけての古墳は畿内地方に集中するが、同時にこの畿内型古墳が中国・四国から、北九州・中部・関東・東北地方にまで造営される現象がみられる。もちろん、その背景には、畿内を中心とする大和朝廷の勢力の拡大を考えることができる。

後期古墳

五世紀後半から六世紀には、古墳文化は大きく変化した。家族墓としての性格を持つ横穴式石室が用いられるようになり、墳丘の規模はしだいに縮小し、天皇陵を最後に前方後円墳は築造されなくなり、円墳や大規模な方墳が築造される。石棺も長持形石棺へ移り、副葬品としては、馬具・鉄製武器・須恵器など実用的なものが多

図4　石棺のいろいろ

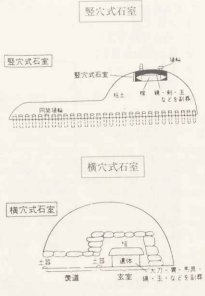


図3　石室の種類

くなる。

六世紀は群集墳の時代ともいわれ、小円墳が全国いたるところに造られる。群集墳とは、一定の地域内に等質的な内容の古墳が短期間に多数形成される古墳群のことである。直径一〇～二〇メートル前後の小形円墳群は横穴式石室を主流とし、地域によっては七世紀末まで造築が続いている。このことは、古墳被葬者数の増大を意味し、特定首長のための古墳の他に、各地の集団内の家父長層も古墳に埋葬されるようになってきたことを示している。大牧一号古墳を含む大牧古墳群の成立も当時期（六世紀後半）である。

古墳の消滅

厚葬思想を背景として出現した古墳は、七世紀に入ると薄葬へと変化する。その理由は明確ではないが、巨大な古墳を造ることによる経済力・労働力の消費、それにともなう生産の低下などの矛盾、権力構造の変化などの政治的要因、大陸における薄葬思想の影響等々を挙げよう。大化二年（六四六）春三月甲申の詔、いわゆる大化薄葬令の発布によって墳墓の規制が行われ、これからは、事実上古墳の築造は急速に終末的様相を顕著にし、やがて火葬の普及へと向かって行くのである。

※同笵鏡＝同じ鋳型から作った鏡

表5　古墳関連年表

西暦	時代	天皇	できごと	代表古墳
239	弥生時代		倭の女王卑弥呼，魏に遣使を送り，親魏倭王と100枚賜る	
243			卑弥呼，魏に遣使を送る	
248			卑弥呼没す，径100歩の墓をつくり，奴婢100余人を殉葬する	
350	古墳時代（前期）		このころから，古墳がつくられはじめる	◉箸墓古墳（奈良）
369			このころに，任那日本府が成立	◉高倉車塚古墳（岡山）
372			百済，日本に七支刀，七子鏡を献上する	◉桜井茶臼山古墳・西殿塚古墳・メスリ山古墳（奈良），椿井大塚山古墳・南塚古墳（京都），黄金山古墳（大阪），槙原古墳（滋賀），石塚山古墳（福岡），赤塚古墳（大分）
391			倭軍，高句麗と百済，新羅と戦う 西日本のみならず，関東・東北の一部にまで古墳がつくられるようになる	◉箸墓古墳・柳本尾山古墳・渋谷向山古墳・新山古墳・東大寺山古墳（奈良），黄金塚古墳（大阪），元稲荷古墳・妙見山古墳（京都），石山古墳（三重），石清尾山古墳（香川），造山古墳（岡山），馬山4号墳（鳥取），銚子塚古墳（福岡），金蔵山古墳（岡山），松林山古墳・三島平石墳（静岡），公津大塚山古墳（福島），八幡塚古墳（栃木），朝子塚古墳（群馬），川柳将軍塚古墳（長野）
404		仲哀	倭軍，帯方郡に出兵し，高句麗と戦い，敗退する 巨大古墳がさかんに築造されるようになる	◉前方後方墳・勝之越命陵古墳・室大墓古墳・コナベ古墳・垂仁陵古墳（奈良），塚平陵古墳・津堂城山古墳・仲津陵陵古墳・墓山古墳（大阪），造山古墳・作山古墳・月の輪古墳（岡山），北山古墳（鳥取），赤城茶臼山古墳・天神山古墳（群馬）
413		応神	倭王讃，東晋に使を遣わして方物を献上する	
421			倭王讃，宋に貢献する	
438			倭王讃没し，弟珍立つ	
443			倭王珍，宋に貢献する	
478			倭王武，宋に貢献する	
479			このころから，須恵器生産がはじまる 倭王武，宋に貢献する このころ，大王陵が形化する このころ，一部の地域で，横穴式石室が築造されはじめる	◉応神陵古墳・仁徳陵古墳・御廟山古墳・元稲陵古墳・堂山古墳・磯長陵古墳（大阪），ウワナベ古墳・河合大塚山古墳・佐味田宝塚古墳（奈良），三ツ城古墳（広島）千人塚古墳，作山古墳（岡山），月の岡古墳・石人山古墳（福岡），北田原山古墳（熊本），金崎古墳・薬師山古墳（島根），断夫野山古墳（愛知），瓦工稲荷山古墳（埼玉）
502		継体	倭王武，征東将軍に従る	
512			百済，任那の4県譲り	◉元墳山古墳（福岡），横田下古墳（佐賀），千足古墳（岡山），芝山古墳・摂塚古墳（大阪）
527			筑紫国造磐井，反乱をおこす	◉今城塚古墳・ニサンザイ古墳・見瀬陵古墳・白鳥陵古墳（大阪），別所大塚山古墳・西乗鞍古墳（奈良），南塚古墳・天塚古墳（京都）岩戸山古墳（福岡），上長古墳（島根），ニッ山古墳，ニ子塚古墳（群馬），断夫山古墳・大須二子山古墳（愛知），三角塚古墳（茨城）
538	古墳時代（後期）	欽明	このころから，古墳がつくられはじめる 百済，仏像と経論を献上する 百済，高句麗と新羅の通知を疑い，倭に救援を求める。また，仏像と経論を献上する 百済，仏教伝来とのびに僧・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工を贈る 蘇我馬子，蘇我氏は排外主義を貫き，崇仏派の立場を鮮明にする 聖徳太子，摂政となる 用明天皇を河内磯長谷陵に改葬する 巨石・切石造りの石室，盛行する	◉石上大塚古墳・ウワナリ古墳・見瀬丸山古墳・新沢千塚古墳群（奈良），用明陵古墳・敏達陵古墳・清寧陵古墳・陶器千塚古墳群・高安古墳群・信太山古墳群（大阪），こうもり塚古墳・五郎十一郎古墳群（岡山），丸金寺古墳（島根），三明古墳（鳥取），舟塚古墳（茨城），谷津塚古墳（千葉），鶯横山古墳（静岡）
552				
588				
593		推古		大牧一号古墳
600			新羅，任那と戦う，出兵して新羅を降服させ聖徳太子・蘇我馬子による「天皇記」「国記」を作成 小野妹子を隋に派遣する 聖徳太子・蘇我馬子による「天皇記」「国記」を作成 聖徳太子，斑鳩宮に没する 蘇我馬子没す 遣隋使はじまる 冠位十二階を定め，憲法十七条を定む このころになると古墳の数は減少し，その中心は大和に限られるようになる 新羅を討伐する 百済王に遣唐使を戒い大敗する 蝦夷に遣唐する 大宝律令施行 平城に遣唐する	◉石舞台古墳・越前屋山古墳・天武・持統合葬陵古墳・文禄院西古墳・草墓古墳・峯塚古墳・木部古墳（奈良），聖徳太子墓・お亀石古墳・二子塚古墳・椿古墳・松井塚古墳（大阪），唐人塚古墳（岡山），御年代古墳（広島），山ノ上古墳・松穴山古墳・宝塚山古墳（群馬），竜角寺浮屋古墳（千葉），宮地屋古墳（福岡）
601				
603				
604				
607				
608				
622				
626				
630	飛鳥時代（前期）	舒明		
640				
663		天智		◉高松塚古墳・薬子千塚古墳・中尾山古墳・百済浦古墳・塚穴山古墳（奈良），御猟山古墳（大阪）
667				
694		持統		
702		文武		
710		元明		

Ⅰ　百舌鳥古墳群
1　大仙(仁徳)
2　田出井山(反正)
3　百舌鳥陵山(履中)
4　土師ニサンザイ
5　御廟山
6　イタスケ
7　大塚山

Ⅱ　古市盾津古墳群
1　津堂城山
2　仁徳市ノ山(允恭)
3　浜田仲ッ山(仲津姫)
4　誉田山(応神)
5　岡ミサンザイ(神功)
6　墓山
7　野中ボケ山(仁賢)
8　古市前山(百舌鳥)
9　白髭山(清寧)
10　古市墓山(安閑)

Ⅲ　馬見古墳群
1　河合大塚山
2　乙女山
3　巣山
4　新木山

Ⅳ　柳本古墳群
1　西殿塚
2　渋谷向山(景行)
3　柳本行燈山(崇神)
4　櫛塚

Ⅴ　佐紀盾列古墳群
1　五社神山(神功)
2　佐紀石塚山(成務)
3　佐紀陵山(日葉酢姫)
4　ヒシアゲ山(磐之姫)
5　コナベ
6　ウワナベ
7　市庭(平城)

①楽金山
②久津川車塚
③楯井大塚山
④西池宝来山(垂仁)
⑤都山新木山
⑥東大寺山
⑦西山
⑧桜井茶臼山
⑨メスリ山

⑩石舞台
⑪平田梅山(欽明)
⑫見瀬丸山
⑬鳥屋ミサンザイ(宣化)
⑭蛇ノ目
⑮宮山
⑯春日向山(用明)
⑰山田高塚(推古)

⑱太子西山(敏達)
⑲叡福寺北(聖徳太子)
⑳心合寺山
㉑河内大塚山
㉒黒姫山
㉓天王寺茶臼山
㉔相良黄金塚
㉕天武・持統合葬陵
㉖高松塚

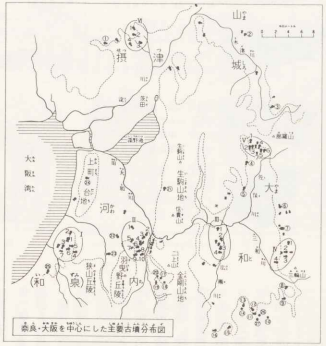


図5　奈良・大阪を中心にした主要古墳分布図

第二章　岐阜県の古墳

右上の長さ三・五センチメートル、四世紀大阪府紫山古墳
左上　四世紀、福岡県一貴山銚子塚古墳
中　五世紀、京都府竹野郡産土山古墳
下　六、七世紀、京都府中郡桃谷古墳

写真8　勾　玉

右の長さ一二・七センチメートル
五世紀、兵庫県姫路市宮山古墳

写真9　金製耳飾

長野県飯田市妙前大塚三号古墳

写真10　金銅製の眉庇付冑

熊本県船山古墳

写真11　金銅製の冠

右　高さ九一センチメートル
群馬県佐波郡赤堀村出土
左　高さ六四センチメートルと
五七センチメートル
埼玉県大里郡江南村出土

写真12　埴　輪（農夫と踊る農夫）

群馬県太田市出土

写真13　兵士の埴輪

一、美濃のクニグニの成立と豪族

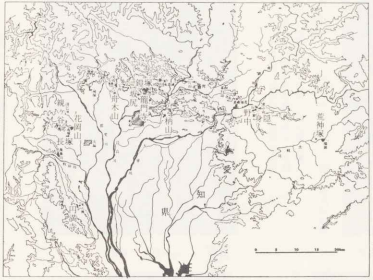


図6　岐阜県における発生期の古墳分布

岐阜県には、三五〇〇余基もの古墳があり、「古墳の宝庫」であるといわれている。その中でも、もっとも古い古墳は、海津郡南濃町にある円満寺古墳で、四世紀初めのものといわれている。ここから三枚の銅製の鏡（中国製の三角縁神獣鏡）が出土している。このうちの一枚は、大和朝廷の勢力範囲にあった京都府大塚山古墳から発見された鏡と同じ種類のものであった。当時、鏡はどんな意味を持っていたのか。『魏志倭人伝』によると、中国の魏の国主は邪馬台国の卑弥呼に、五枚一組の銅鏡一〇〇枚を贈った（三世紀の頃）とあるように、鏡の授受によって主従関係が結ばれたのである。大和朝廷が地方の豪族に鏡を贈り、臣従を誓わせると同時に、豪族たちに、その地域の権力を保証したのである。

こうしたことから大和朝廷は、円満寺古墳周辺を治めていた地方豪族と結ぶことによって、勢力を東国に伸ばす一大拠点としたことがうかがえる。この土地は、伊勢湾へ注ぐ水路をおさえるのに適した場所であると同時に東への陸路の拠点にもなる条件を備えていたためである。

大和朝廷の勢力は、円満寺古墳に続いて、大垣市の長塚古墳（四世紀中期）の地を支配下に治め、順次、東進していった。このことは鏡（中国から伝わったもの）・伊製（日本で作られたもの）三角縁神獣鏡と、多数の玉類や碧玉製腕輪類を蔵した前Ⅱ期の古墳が濃尾平野周辺の山

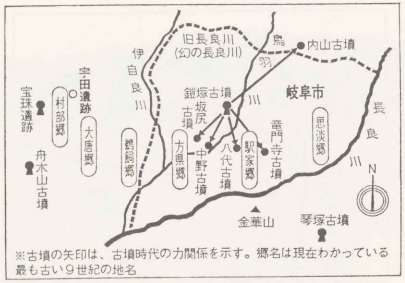


図7　鎧塚古墳付近の豪族の力関係図

麓や丘陵上の各所にみられ、不破郡から可児市にいたる美濃の主要地域をおおっていることから推察することができる。（図6参照）。このような発生期の古墳分布をみると、かなり濃密な分布であり、一定の地域内に一、二基の大規模な古墳（前方後円墳）があり周辺にいくつかの小規模古墳（円墳）が築かれていることがわかる。こうした小規模円墳の被葬者が、直接大和朝廷とつながりを持ったとは考えられないところから、二、三キロメートル四方の地域を支配するこのような小規模円墳の被葬者をまとめる大豪族がいたと考えられる。大和朝廷の勢力が県内に伸びる以前、すなわち、古墳が出現する以前は、こうした豪族が地方国家のようなものを形づくっていたのであろう。

このような地域が大和朝廷と手を結ぶとたちまち内部変化が生じてくる。その地域全体を代表する長が生まれると、大和朝廷は、権力の象徴とする鏡、武器などを与え、その地域をまとめるためにてこれをした。その結果、狭い地域内でも身分格差がしだいにはっきりし、小豪族、大豪族の力の差も生じてきた。

例えば、岐阜市の北部の古墳の場合、高さ九六メートルの眉山の山頂にある鎧塚古墳の主が、大和朝廷と直接手を結ぶことによって周囲一帯の実権を握ったとみられる。周囲数キロメートルの範囲にある内山古墳、龍門寺

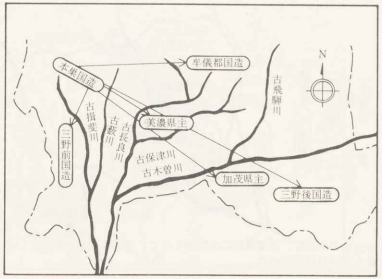


図8　古墳時代・美濃地方の豪族勢力分布

古墳、坂尻古墳、中野古墳等の主は、いずれも鎧塚古墳に埋葬された豪族の支配下にあったとみられる。

このように大和朝廷の影響が地方におよぶと地域社会も徐々に組織化が進み、いくつかの小さな集落を一つにまとめた地域を「里」と呼び、いくつかの里を合わせた地域が「郡」になった。里にも、郡にも力の強い族長が生まれ支配権を強めていった。

勢力を強めていった地方豪族たちは、朝廷から「国造」とか「県主」という地位を与えられ、朝廷をバックに多くの集落を支配下に組み入れたり、小さな豪族を統合し、貢ものを求め多くの富と力を得ていったのである。

県内の代表的な豪族は、武儀、山県、郡上地方の「牟儀郡国造」、東濃地方の「三野後国造」、海津・安八地方の「三野前国造」、本巣・揖斐地方の「本巣国造」、岐阜市北部の「美濃県主」、可児地方の「加茂県主」、飛騨地方の「斐陀国造」などである。各豪族は、最初、それぞれ独立した地域を治め、勢力範囲を広めていった。当然、隣接の豪族同士はぶつかり合うのだが武力で争ったあとはみられない。むしろ、手を結び合っていったとさえ考えられる。それは、古墳の分布が特定の地域に片寄っていないことから推察できる。豪族同志が手を結ぶ時、かならず婚姻関係を結んだ。そして、互いの一族の家系図を合わせて、同族であることを確かめ合い先祖を同じ天

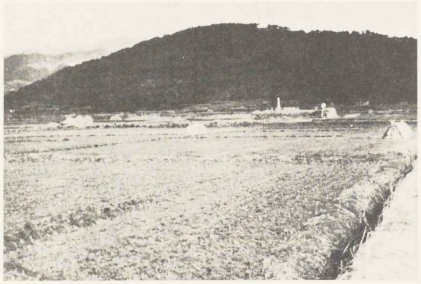


写真14　美濃国分寺遠景

皇とした。このような方法によって、県内の各豪族を抱きかえていったのが「本巣国造」であったと考えられる。はじめは、現在の揖斐郡大野町の南出口古墳（四世紀後期の前方後円墳）の周辺の狭い地域の豪族にすぎなかったが、まず、本巣地方に移り、つづいて美濃県主、牟儀郡国造、加茂県主、両三野国造と、次々と自分の支配下に組みこんでいった。こうして、美濃の全域が平和のうちに統一されていったのである。

こうした頃、内紛が続いていた大和朝廷では、中大兄皇子らが蘇我氏一族を倒して「大化改新」（六四五年）を実現する。そして、各地に国司という中央官僚を送りこんで全国統一に乗り出したのである。国司の役所が「国府」であり、その場所は、飛騨の国府が、吉城郡国府町広瀬町、または、高山市上岡本町の二説があり、美濃国府は不破郡垂井町府中であった。

国府の近くには国分寺・国分尼寺が置かれ、多数の僧侶が行きかい、まさに文化の中心地であった。大垣市赤坂町野野にある美濃国分寺跡は、山の連なりを背にし、ここに五重の塔や金堂が建っていたのである。まるで、奈良の法隆寺のある「いかるがの里」を思わせる風景である。

こうして、岐阜県の歴史は、幕が開くのである。

二、岐阜県の古墳

図9　岐阜県の古墳分布図

(一)　三五〇〇基の古墳分布

飛騨地方を除いた県内の古墳分布をみると、東西に帯状に広がっている。大垣市周辺・揖斐郡南部・岐阜市北部・各務原市・可児市・土岐市と続き、ちょうど濃尾平野をとりまく山すそにはりついたような形で分布している。このような分布になったのは、当時の地形と深くかかわりがあると考えられる。県内各地の山の中から海中生物の化石が大量に発見されており、今の陸地の多くは人間が出現する前の大昔には海の中に沈んでいた。海津郡南濃町にある庭田貝塚から考えると、縄文時代の海岸線は、現在の標高一〇メートルあたりであった。その後も海岸線は徐々に退き、古墳時代には、伊勢湾の最北端が津島市南部まで南下した。また、川筋も今とは大分違っていた。木曽川は天正一四年(一五八八年)の大洪水で現在の流れになったが、それ以前は、岐阜市の近くを流れていた。長良川も古墳時代は、岐阜市の最北端にある内山古墳近くを通り、山県郡高富町を経て、今の伊自良川をルートとしていた。これは〝幻の長良川〟ともいわれている。治水工事は行われず、川は自然のままゆったりと流れていた。大雨が降れば川はあふれ平地には湿地ができた。こうした湿地を水田に利用し、人が住みついたところは、湿地より一段高い場所であった。これが濃

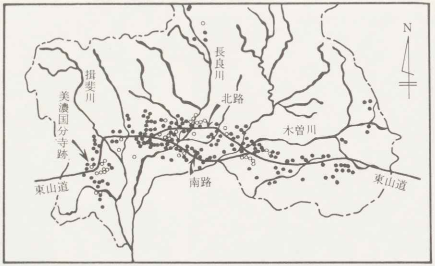


図10　美濃地方の古墳分布と東山道の道筋

●円墳　○前方後円墳　古墳群は一つの点で表した。

尾平野をとりまく山すそになった理由である。

連鎖状のこの古墳分布が、県内でもっとも古い東山道のルートと重なることは興味深いことである。(図10)東山道は、近江(滋賀県)から信濃(長野県)へ抜ける道で、大和朝廷が東方を支配する重要な路線であった。東山道に駅が置かれ、この道が正式に成立したのは、律令制がしかれた八世紀のはじめといわれるが、それ以前にも人々はここを通り、往来がひんぱんであったことは当然考えられる。このように、当時の「岐阜」は、大和朝廷の東方進出の要路にあたり、その拠点として栄えた。

県内に古墳の数が多いのは、古墳群が多いこととかかわりがある。古墳時代の初期には、ごく限られた人の墓しか造らなかったが、後期になると小さな集落でも族長や一族の者が死ぬと古墳を造って埋葬するようになり、いくつもの古墳がかたまって築かれるようになった。

県内の代表的な古墳群は、揖斐郡池田町の願成寺古墳群・池田北部古墳群、同大野町の野古墳群、岐阜市の長良古墳群などであり、一〇〇基余の古墳がかたまっている。こうした大規模なものから、二〜三〇基の小さな古墳群が県内に分布しており、県内、三五〇〇基余の古墳のほとんどがこうした古墳群で占められているのである。これらの古墳の大きさは、せいぜい一〇メートル前後であり、形は円墳がほとんどである。

写真16　高松塚古墳壁画

写真15　二又古墳石室内部

(二)　県内の代表的な古墳

三五〇〇基余存在する県内の古墳の中から、代表的な古墳を紹介したいと思う。ここでは、規模の大きな古墳、装飾古墳、前期の古墳などを取り上げて説明したい。

二又一号墳

〝東海地方唯一の装飾古墳〟県内ばかりか東海地方唯一の装飾古墳は、養老郡上石津町の「二又一号古墳」である。二又支群六基のうちの一つである。形は円墳で、直径一五メートル、高さ四メートルの規模である。内部構造は横穴式石室で、羨道の入口から墳丘をとりまくように葺石が敷きつめられていた。石室は、全長六・五メートル、玄室の長さ四・七メートル、奥壁幅二メートル、入口幅一・五メートル、高さ一・九メートルのさして大きいものではない。ただ石室一面が朱の顔料で塗りつぶされていた。

このような装飾は、きわめて貴重なもので大和朝廷でさえ特別の場合しか使われなかった。こうした朱塗り形式は、大和に発生し、西は九州まで広がり、東は岐阜県が限界である。朱塗り形式は、装飾古墳のもっとも古いものであり、その後赤青の二色塗り、人物画、動物画などの刻線画と変化し、最後は高松塚のような多色塗りの写実画となった。高松塚のようなきらびやかさこそないが、古代のロマンを語るにふさわしいものがある。

写真17　琴塚古墳

昼飯大塚古墳

〝県下最大規模の前方後円墳〟県下最大の前方後円墳である昼飯大塚古墳は、大垣市昼飯町大塚地内にあり、平地の中にどっしりとたたずんでいる。

この古墳は、全長一三七メートル、後円部は直径八三・七メートル、前方部は幅六九メートルで高さ七・三メートルである。まるで小山のようである。古墳の外周には幅一四メートルの濠をめぐらしている。そのほかに、埴輪・葺石を伴う。

内部の主体は、墳丘の頂上から一・五メートル下につくられた竪穴式石室である。

このように初期の段階の古墳は、前方後円墳が多い。円満寺古墳（南濃町）、長塚古墳（大垣市）、遊塚古墳（同）、鎧塚古墳（岐阜市）、琴塚古墳（同）などがその代表的なものである。

岐阜市にある琴塚古墳は、円形と四角形をつなぎ合わせた形の〝前方後円〟の姿を今もはっきりととどめている。全長一一五メートル、後円部直径六九メートルで高さ一〇・五メートル、前方部幅七四・二メートルで高さ七・八メートルの県下第三位の規模を持つ古墳である。周濠は県下唯一の二重濠で、内濠の幅一八・二メートル外濠の幅は七・二メートルあり、境の堤の幅は一四・五メートルある。

写真18　三角縁獣文帯四神四獣鏡(龍門寺一号古墳出土)

龍門寺古墳

〝卑弥呼に近すく銅鏡出土〟

昭和三六年三月、岐阜市長良真福寺字龍門寺の「龍門寺一号古墳」が、宅地造成されることになり発掘調査された。

この古墳は、高さ約三メートル、直径一七メートル、封土のまわりには三〇～五〇センチメートルの犠石を敷き、円筒埴輪や形象埴輪を並べ、多くの副葬品を持つ四世紀後半の円墳であることが判明した。

副葬品の中から、「三角縁獣文帯四神四獣鏡」と名付けられた銅鏡が見つかった。直径三三センチメートル、厚さ一センチ余りの円い鏡は、遠く三国時代(紀元二二〇～二八〇年)につくられ、日本に伝えられた舶載鏡である。中国の史書『魏志倭人伝』によれば、卑弥呼からの朝貢に対し、魏王は下賜品として、卑弥呼に銅鏡一〇〇枚を与えたという。

この鏡の行方は、正確にはわかってはいないが、この龍門寺一号古墳から出土した銅鏡は、「卑弥呼の鏡らしい」ものの一枚だといわれる。(舶載鏡はこういわれる)

この鏡と同じ鋳型でつくられた鏡は、京都の大塚山古墳で発見されている。こうした古鏡がなぜ岐阜の地に伝えられ、古墳の中に埋められたのであろうか。神秘のベールに包まれた弥生の女王卑弥呼は、遠い中国から渡ってきたこの鏡を与え臣従を誓わせたのだろう。

写真19　三角縁波文帯三神三獣鏡(円満寺古墳出土)

「龍門寺一号古墳」にみられる舶載鏡を有する古墳は、県内では今のところ一〇基ほどが確認されている。

南濃町の円満寺古墳から三角縁波文帯三神三獣鏡はか二面、赤坂町の長塚古墳からも波文帯三神三獣鏡はか二面、我が各務原市の一輪山古墳からも三角縁波文帯四神二獣鏡がそれぞれ出土している。

こうした古墳から出土する三角縁神獣鏡・舶載鏡は、この地方の豪族が大和朝廷に従ったしるしに、朝廷から贈られた銅鏡とされている。

このことから、大和朝廷の勢力が、西濃・南濃地方を中心に、しだいに東へ広がっていったことがわかる。

表6　古墳時代前期の古墳

注)(舶)とは、舶載鏡といって中国から伝わった鏡を示す。

古墳群	墳名	墳形	内部構造	鏡
不破	親ヶ谷遊長塚	円	粘土槨	14
	宮代塚	前方後円	粘土槨	
	某墳	前方後円?	粘土?	6(舶3)
揖斐東	城塚	前方後円	竪穴式石室	1(舶)
本巣	舟木山24号	円	粘土槨	5(舶1)
岐北	坂尻	円	粘土槨	3(舶1)
	龍門寺	円	粘土槨	3(舶2)
	龍門	前方後円	竪穴式石室	
	印内山	前方後円	粘土槨	2(舶)
各務原	一輪山	円	?	1(舶)
可児	白山	円	粘土槨	2
	御嵩	円	粘土槨	3(舶1)
	野中	前方後円	竪穴式石室	1
海津	円行寺	前方後円	竪穴式石室	3(舶)
	東満寺	円	粘土槨	4
	天基神	円	粘土槨	2(舶1)

三、古墳文化の展開

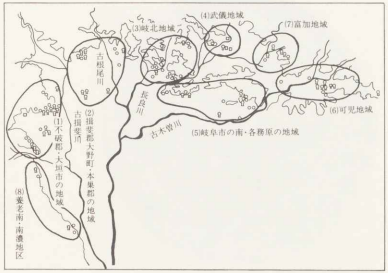


図11　美濃地方の古式・有力古墳分布図

県内におけるもっとも古い古墳は、海津郡南濃町の円満寺古墳であることは先に述べた。この古墳は、京都の大塚山古墳のような中国製の三角縁神獣鏡と若干の鉄製品のみを副葬した古式の竪穴式石室を持つ前1期のものである。前1期の古墳は、県内では現在のところ円満寺古墳ただ一基である。その後の、舶載・仿製の三角縁神獣鏡と多数の玉類や碧玉製腕輪類・甲冑・武器類を有する前II期の古墳は、美濃の主要地域のほとんどをおおっていることも先にみた。

図11は、美濃地方の古式、あるいは規模・出土品などからみて有力と思われる古墳の分布のようすである。この図をよくみると、いくつかのまとまりをみせながら広がっていることがわかる。

さて、古墳時代の後期になると、これらの地域を中心にしながら、古墳群が急激に増加し、美濃地域全体をおおいつくしてしまうのである。

このようにして古墳文化が展開されていくのだが、ひとつひとつの古墳を取り上げ詳述する余裕はないので、顕著と思われる古墳や古墳群について簡単にふれることにする。

そこで、便宜上美濃地方の古墳群を四地域に分けてまとめることにする。㈠揖斐川流域　㈡長良川流域　㈢木曽川流域　㈣三川下流域の四地域である。

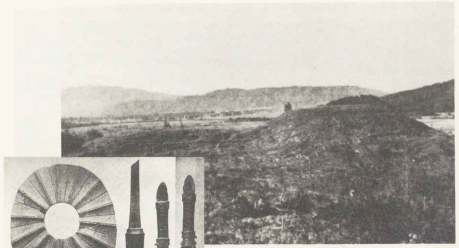


写真20　遊塚古墳遠景

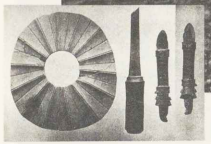


写真21　遊塚古墳出土品（石製模造品・車輪石）

揖斐川流域の古墳

・揖斐両郡に渡り、南北二〇キロメートル、東西一五キロメートルにおよぶ地域である。この地域は「不破古墳群」「揖斐西部古墳群」「揖斐東部古墳群」と呼ばれる古墳群から成り立っている。

〈揖斐川流域の主要古墳〉

・親ヶ谷古墳（垂井町）池田山の南端一九三メートルの頂部に位置する円墳。鏡、石製品など多数出土。

・南大塚古墳（垂井町）一辺二五メートル、高さ約八メートルの二段築成の方墳。巨石を使った横穴式石室を持ち、全長一五メートルの大きなものである。

・遊塚（赤坂町）金生山西南麓の五〇メートルの丘の頂部に前方後円墳一基、円墳二基がある。多くの出土品有。円筒埴輪、葺石を有する。

・花岡山古墳群（大垣市荒尾町）前方後円墳二基、円墳三二基、第五号墳から人骨一七体が出土している。

・長塚古墳（赤坂町）前方後円墳で埴輪を伴う。舶載三角縁神獣鏡、仿製鏡三面、玉類等が多数出土。

・野口古墳群（揖斐郡大野町）前方後円墳五基、円墳七基の大規模な古墳を中心にして二〇〇基をこす小古墳を伴う大古墳群である。

・願成寺古墳群（揖斐郡池田町）二一〇七基の大古墳群。

揖斐川流域に含まれる古墳分布区域は、薮川より西の不破郡・揖斐郡に渡り、南北二〇キロメートル、東西一五キロメートルにおよぶ地域である。この地域は「不破古墳群」「揖斐西部古墳群」「揖斐東部古墳群」と呼ばれる古墳群から成り立っている。

〈揖斐川流域の主要古墳〉

・親ヶ谷古墳（垂井町）池田山の南端一九三メートルの頂部に位置する円墳。鏡、石製品など多数出土。

・南大塚古墳（垂井町）一辺二五メートル、高さ約八メートルの二段築成の方墳。巨石を使った横穴式石室を持ち、全長一五メートルの大きなものである。

・遊塚（赤坂町）金生山西南麓の五〇メートルの丘の頂部に前方後円墳一基、円墳二基がある。多くの出土品有。円筒埴輪、葺石を有する。

・花岡山古墳群（大垣市荒尾町）前方後円墳二基、円墳三二基、第五号墳から人骨一七体が出土している。

・長塚古墳（赤坂町）前方後円墳で埴輪を伴う。舶載三角縁神獣鏡、仿製鏡三面、玉類等が多数出土。

・野口古墳群（揖斐郡大野町）前方後円墳五基、円墳七基の大規模な古墳を中心にして二〇〇基をこす小古墳を伴う大古墳群である。

・願成寺古墳群（揖斐郡池田町）二一〇七基の大古墳群。

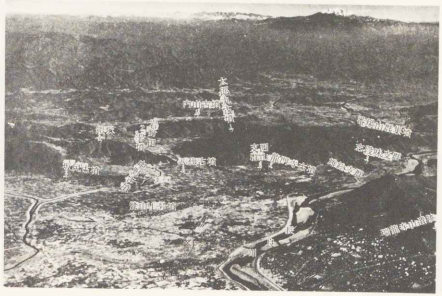


写真22　岐阜市北部の古墳分布

長良川流域の古墳

この地域に含まれる範囲は、薮川以西、長良川以北で、岐阜市北半分・山県郡・武儀郡・関市・美濃市・美濃加茂市・郡上郡という広大な地域にわたっている。この地域を大きく分けると、本巣古墳群・岐北古墳群・武儀古墳群・加茂古墳群・その他の五群に分かれる。ここで中心をなすのは、本巣古墳群（文珠・舟木山・黒野などの支群を有している）と岐北古墳群（長良・常磐・鷺山・岩野田・三輪などの支群を有している）の二つの古墳群である。

〈長良川流域の主要古墳〉

・舟木山古墳群（糸貫町・本巣町・岐阜市の境所在）二七基の円墳を有する。二四号墳から船載の銘獣文鏡が出土している。

・鎧塚古墳（岐阜市岩崎眉山所在）全長八〇メートルの前方後円墳で、鎧が出土したといわれている。

・坂尻古墳（岐阜市城田寺所在）船載の獣文帯三神三獣鏡を出土した。直径三〇メートルの円墳。

・龍門寺一号墳（二八ページ参照）。

・内山古墳（岐阜市太郎丸所在）前方後円墳で船載の三角縁四神四獣鏡他一面の銅鏡が出土している。

・瀬尻方墳（関市小瀬所在）関市の代表的な方墳である。

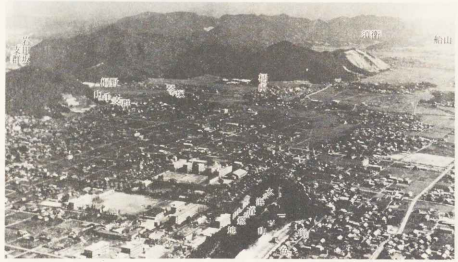


写真23　岐阜市東部・各務原市西部の古墳分布

木曽川流域の古墳

木曽川流域の古墳群は三地域に分かれて分布している。

岐阜市東方から各務原市の古墳群・木曽川流域の可児古墳群・多治見以東の諸地域に分散する各古墳群の三地域である。（各務原地域は後述する）

〈木曽川流域の主要古墳〉

・瑞龍寺山古墳群（岐阜市・金華山から南にのびた標高一五〇メートル程の支丘に分布する古墳群。四四基の円墳から成る。弥生時代の岐阜市南部の中心地であった。弥生の集落跡や銅鐸が出土している。

・琴塚古墳（岐阜市・県下第三位の前方後円墳。

・前波古墳群（可児市）可児古墳群の中心的地位を占める。首吊塚古墳という珍らしい名の古墳がある。

・野中古墳（御嵩町）仿製の三角縁神獣鏡が出土した。全長五八メートルの前方後円墳である。

・身隠山古墳（可児市）白山古墳と御嵩古墳の二基から成り、鏡、石製品など多くの遺物が出土した。

・東寺山古墳（御嵩町）二基のうち一基は、県下唯一の前方後方墳である。全面に葺石がみられる。

・荒神塚古墳（瑞浪市）直径五七メートルの県下第二位の円墳である。

東濃地方における古墳は、数もやや少なく、六・七世紀のものがほとんどで前期のものはみることができない。

第三章　各務原市の古墳

写真24　円満寺古墳石室部

写真25　円満寺古墳遺物出土状況

三川下流域の古墳

揖斐・長良・木曽三川の下流域の古墳群は、牧田川以北の養老北部古墳群・牧田川以南の養老南部古墳群・海津古墳群の三地域に大別することができる。

〈養老北部古墳群〉

南宮山の南麓の上石津町および養老町の一部を含めた牧田川北岸一帯の地域に分布する古墳群である。古墳群としては小規模であるが、近江から濃尾平野への通路として重要地域である。二又古墳が含まれる。

〈養老南部古墳群〉

養老山地の東山麓扇状地や山腹に古墳が南北に点々と連なり、一大古墳群を形成している。

〈海津古墳群〉

養老山地の南半分、海津郡の山地の東山麓にある。ここには、県下唯一の庭田・羽沢貝塚がある。県最古の円満寺古墳（前述）と天神古墳からは、舶載の三角縁神獣鏡が出土している。

〈主要な古墳〉

。二又一号墳―養老郡上石津町二又にある装飾古墳。

。円満寺古墳―南濃町庭田、全長六〇メートルの前方後円墳で、舶載鏡三面が出土し、県内最古の古墳として有名である。

一、古墳分布とその特徴

古墳の出現　弥生時代にはじまる水稲耕作の進展は、生産力を高め、生活習慣や社会的なつながりまでをも揺り動かし、根本から変えてしまった。

その表れが古墳である。古墳は、土を盛りあげて築いた特別な墓（高塚式墳墓）で、そこには水稲耕作の発展にともない、土地支配の権力者として成長していった首長が埋葬された。このことは、支配者、被支配者の関係が生じたことを示し、支配者が権力の象徴として、地上に壮大な墳丘を持つ古墳を築くだけの生産力を持ったことを示している。

古墳は弥生時代に続く四世紀頃から築かれはじめ、四世紀末から五世紀にかけては壮大なものとなり、七世紀まで続いた。

古墳がはじめて造られたころは、前方後円墳が多く、そこに住む人々と神とを結ぶ祭祀の場所でもあった。つまり、前方後円墳の後円部に竪穴石室を造り首長を埋葬し、前方部は共同体の人々の祭祀の場所としたのである。したがって、古墳を築く場所は共同体の居住地の見おろせる近くの山や丘陵、台地上でなければならなかった。

その後、大和朝廷と結ぶことにより、権力の象徴としての古墳という色彩を帯びてくるようになり、大規模なものとなっていった。さらに、時が経つと、集落の長や一族の者、戸主までが墳墓を造るようになり、急激に墳墓の群れが発生するようになった。こうして、各地に多くの古墳群が形成されるようになった。

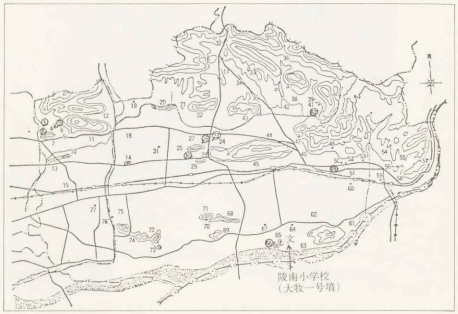
こうした古墳発生の波は、我が各務原市にも押し寄せてきたのである。

古墳の分布　各務原市には、総数六〇〇基あまりの古墳があったといわれている。

市の古墳分布図をながめてみると、ほとんどが北部の山すそや南部の丘陵地に分布し、市の中央部を占める東西一〇キロメートル、南北二〇三キロメートルの各務原台地上にはあまり分布していない。数少ない台地上の古墳は、台地の縁部に位置し中央部には全くみられない。

このような分布をみせるのは、当時の水稲耕作が弥生時代と同じように中小河川沿いや山沿いの低湿地に広がり、居住地域が付近の自然堤防沿いや下位段丘、中位台地の縁部に位置したことを物語っている。同時に、古墳が共同体の見渡せる場所に築かれる必要があったためである。

四～五世紀の前期の古墳分布は、桜山・長塚・琴塚古墳を中心とする「ナカ勢力」と、坊の塚・衣裳塚・一輪山古墳を中心とする「ウヌマ勢力」に分けられる。



1　観音寺古墳群　2　尾崎古墳群　③南塚古墳　4　南畑古墳群　⑤　柄山古墳
6　柄山古墳群　7　土山古墳群　⑧土山古墳　9　西市場古墳群　10　山後古墳群
11　権現山古墳群　12　南洞古墳群　13　山目向古墳群　14　巾下古墳群　15　浜見塚古墳群　16　北山古墳群　17　東山古墳群　18　大島中古墳群　19　宮塚古墳
20　加佐見山古墳群　21　市林前古墳　22　外山古墳群　㉓　坂井狐塚古墳　24　安積野古墳群　25　行念寺古墳群　㉖　的場古墳　27　熊田山北古墳群　28　熊田山南古墳群　29　野口南古墳群　㉚　野口南大塚古墳　31　広畑遺跡　32　御林古墳群
33　稲田山古墳群　34　南屋敷古墳群　35　鮎山北古墳群　36　天狗谷古墳群　37　会本古墳群　38　御坊山古墳群　39　洞西古墳群　㊵　洞ひさご塚古墳　41　洞東古墳群
42　村国古墳群　43　鮎山古墳群　44　各務山古墳群　45　山の前古墳群　46　天野古墳群　47　郷戸古墳　48　松田古墳　㊾　坊の塚古墳　50　衣裳塚古墳　51　一輪山古墳　52　西町古墳群　53　二ノ宮神社古墳　54　東町古墳群　55　桑原野古墳群
56　金鶏塚古墳　57　宝積寺古墳群　58　山崎古墳群　59　村国真墨田神社古墳
60　狐塚古墳　61　八龍古墳群　62　丸子山古墳群　63　大伊木古墳群　64　大伊木山西古墳　65　大牧古墳群　㊻　ふな塚古墳　67　星塚古墳　68　長根山古墳群
69　矢熊山北古墳群　70　荒井山古墳　71　荒井山古墳　72　西洞山北古墳群
73　西洞山古墳群　74　三井山南古墳群　75　三井山北古墳群　76　葵加山古墳
77　三井西古墳

図12　各務原市の古墳と古墳群の分布
（○印は、前方後円墳）

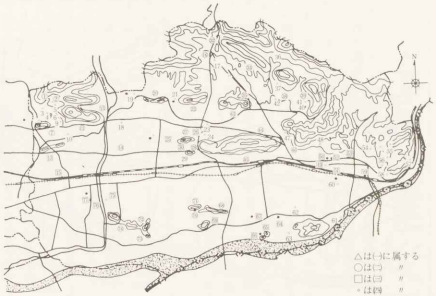


図13　各務原市の立地別古墳分布

古墳の立地上の特色

市内六〇〇基の古墳の立地する地形をみると次のように分けることができる。

㈠　山頂および丘陵尾根上に立地するもの。

代表的なものに柄山古墳がある。この古墳は独立した丘陵の柄山（標高四一メートル）の山頂を利用して築いた前方後円墳である。この他に、権現山古墳群・那加、東山古墳群（蘇原、村国古墳群（各務、桑原野古墳群（鵜沼）などが属する。

これらはいずれも低位丘陵上に立地している。一番高所に立地するのは、権現山一五号墳で標高一〇〇メートルの所である。

㈡　山麓・山腹に立地するもの。

本市の古墳の大部分がここに属する。これらは後期の古墳群を形成するものが多い。

㈢　中位台地（各務原台地）上に立地するもの。

坊の塚・衣裳塚・一輪山古墳、ふな塚・星塚古墳、そして、大牧古墳群がこれに属する。

㈣　中、下位段丘などの平地に立地するもの。

南塚古墳、西市場・山後古墳群（那加、宝積寺古墳群、狐塚・村国真墨田神社古墳（鵜沼）坂井狐塚古墳（蘇原）などがこれに属する。

写真27　鶏頭埴輪（柄山古墳出土）

二、特色のある古墳

古墳の形

古墳は地上に壮大な墳丘を持った高塚であるため、その外形により前方後円墳・前円後円墳（双円墳）・円墳・前方後方墳・方墳などに分類される。一般的には、前方後円墳や円墳が多く、よく知られている。

各務原市域の前方後円墳は、県下第二位の規模を有する坊の塚古墳（全長二二〇メートル）、柄山古墳を代表として、その他に、南塚古墳、的場古墳、野口南大塚古墳、坂井狐塚古墳、洞ひさご塚古墳などが確認されている。土山古墳、ふな塚古墳は、まだ不明である。

円墳は、市に分布する六〇〇基の古墳の大部分を占めており、後期の古墳群のほとんどがこれに属している。直径五二メートルの衣裳塚古墳は、県下最大規模を持つ円墳である。金鶏塚古墳は三七メートルの円墳である。

古墳の外部施設と内部主体

古墳を築くために石を運んだり、溝を掘ったり、盛土をもりあげるために多くの労力を必要とした。

墳丘は人工的に土盛りをして築くため雨風で崩れ土砂が流れやすい。それを防ぐため墳丘に葺石をふいた古墳がある。柄山・坊の塚・ふな塚古墳などがこれに属する。「埴輪」を有した古墳は、坊の塚・柄山・土山古墳と三井山北古墳群の一基の計四基のみである。柄山古墳から

写真28　熊田山南古墳群一号墳

写真29　松田古墳

めずらしい鶏頭埴輪が出土している。

「石室」を有する古墳――石室には、竪穴式石室と横穴式石室がある。

竪穴式石室を有するのは、坊の塚古墳だけである。この形式の石室は、古墳時代前期の特徴の一つである。したがって、それより古い一輪山古墳や柄山古墳などは石室が不明であるが竪穴式石室であると推定される。

横穴式石室は後期（六世紀以降）の古墳の特徴の一つを示すものである。この石室は、追葬が可能で家族墓的性格を持っている。山日向古墳群、西洞山古墳群、二の宮神社古墳、手力雄神社西・東古墳など多数の古墳に見られる。なかでも、熊田山南古墳群一号墳は巨石墳であり、市内では他に見られない。

「石棺」を有する古墳――横穴式石室の内部に石棺を有する古墳は、市内では大牧一号墳（陵南小学校校庭）、大牧団地北）、狐塚古墳（鵜沼第一小学校西）、松田古墳、山日向一六号墳の五基である。松田古墳の石棺は組石石棺で、他の四基は家形石棺である。（大牧一号墳、ふな塚古墳、狐塚古墳の石棺については次章で詳述する）

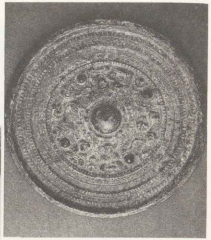


写真30　三角縁波文帯四神二獣鏡（一輪山古墳出土）

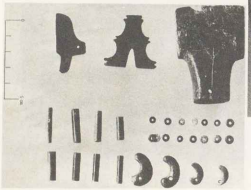


写真31　石製模造品（坊の塚古墳出土）

「副葬品」は、古墳の石室内に死体と一緒に副葬された品々で、前期と後期とでは様相に変化がみられる。前期では、鏡をはじめ碧玉製の石鋤・車輪石（腕飾り）など呪術的な意味を持つものや斧・ノミ・刀子などの石製模造品のように祭祀の道具と考えられるものが中心である。また、鉄製の武器・武具なども五世紀頃から埋納されるようになった。

各務原市の前期の古墳の副葬品は数少ないが、一輪山古墳の鏡と、坊の塚古墳の石製模造品や玉類などがある。一輪山から出土した中国製の三角縁波文帯四神二獣鏡は島根県八日山一号墳のものと同笵（同じ鋳型のもの）であり大和政権との結びつきを示している。坊の塚古墳からは石製の斧や刀子・勾玉・管玉・臼玉などが出土している。その他に馬形埴輪が出土したといわれている。

後期になると、石室の変化とともに副葬品も変化し、生活用具である土器などが副葬されるようになる。土器は弥生土器の流れをくむ土師器や朝鮮半島から移入した硬質土器の須恵器である。その他、刀剣類・馬具・玉類なども副葬された。ふな塚古墳からは、杏葉（馬の飾り）が出土し、大牧一号古墳からは、馬具が多数出土している。（次章で詳述する）

古墳時代後期の古墳からの出土品は、ほとんどが須恵器で占められている。

三、市内に残る古墳

各務原市には六〇〇基の古墳が分布していたが、山林開発や宅地造成、土地改良事業などによって、多くの古墳が破壊され消滅してしまった。今も残る市内の古墳の数は、約一五〇基ほどである。それぞれについて述べることはできないので、主な古墳を取り上げて叙述することにする。

坊の塚古墳

鵜沼羽場町に所在し、県指定史跡となっている。県下第二位の規模を持つ前方後円墳で、全長一二〇メートル、後円部直径七二メートル、高さ一〇メートル、前方部幅六六メートルある。周濠は東部と南部にそのおもかげをとどめている。後円部の中心の深さ一・五メートルのところに竪穴式石室があった。墳丘は、一面葺石でおおわれ、円筒埴輪が並べられていたといわれている。ここからは、多くの石製模造品や勾玉・小玉・管玉などが出土した。

昔、この古墳を村人が掘りおこそうとしたところ、鍬の先が古墳の蓋の石にあたり火花を発し、おりからの風にあおられ飛火して村全体が焼けてしまったという言い伝えを持っている。その後、こうしたたりをおそれ、古墳にふれる者はいなくなったという。（五世紀中頃）

衣裳塚古墳

鵜沼羽場町の空安寺の東側にある直径五二メートル、高さ七メートルほどの県下一の円墳である。（五世紀前頃）

この古墳の南東五〇メートルの所に「一輪山古墳」という直径二〇～二八メートルほどの円墳があった。ここからは、船載の三角縁波文帯四神二獣鏡が出土している。

船山北古墳群一号墳

この古墳は、須衛町にある横穴式石室を持つ円墳である。盛土が流されて残っていないので大きさはわからないが直径一〇メートル前後と推定される。石室は露出しているが、ほぼ完全な状態で残っている。

御林古墳

この古墳も須衛町にあり、横穴式石室を持つ円墳である。盛土はほとんど流出しているが石室の石組みは完全に残っている。この古墳のほかにも、一部分こわれているが石室を見ることのできる古墳が数基この付近にあり、古墳群を形成している。

宮塚古墳

蘇原宮塚町にあり、市指定史跡となっている。この古墳は、言い伝えによると、伝蘇我倉山田石川麻呂の墓といわれ、当時この地方は、蘇我倉山田石川麻呂が県主として赴任していたが、後に大化の改新の功績によって右大臣になり、その後、政争で死に追いやられたため、それを聞いた村人たちが彼をしのんで遺骨を葬ったと言われている。（円墳らしい）

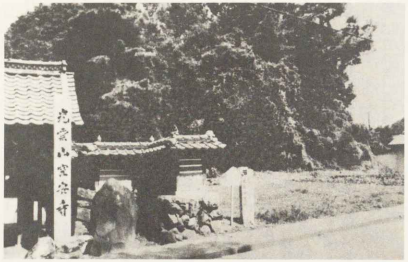


写真32　衣裳塚古墳

写真33　船山北古墳群一号墳

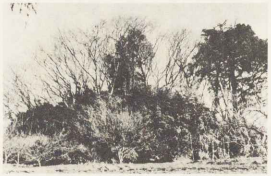


写真34　金鋼塚古墳

柄山古墳（がらやまこふん）

那加柄山町にあり、県指定史跡となっている。全長八二メートル、後円部直径五四メートル、同高さ八・四メートル、前方部幅三八メートル、同高さ五メートルの前方後円墳である。この古墳は、東西にのびる柄山の尾根をほぼ中央で切断し、その西部に築かれたものである。前方部二段、後円部三段の葺石が残っている。また、この古墳からは鶏（にわとり）埴輪の頭部が出土し、すでに当時、鶏が飼育されていたことを物語っている。（四世紀末～五世紀初頭と推定される）

金縄塚（かななわづか）古墳

鵜沼東町にあり、市指定史跡となっている。直径約三五メートル、高さ四・五メートルの円墳で、後ろに山があり、まわりは畑に囲まれ、鵜沼地区一帯が見渡せる高台の上に築かれている。

江戸時代に書かれた『濃陽徇行記（のうようじゅんこうき）』によれば、「桑原野という所に金縄塚という塚があり、毎夜塚の中から鶏の鳴き声が聞こえていました。ある時、鵜沼本郷に住む甚之右衛門という人が、ひとりでつけをたくらみ、この塚を掘ったが宝しいものは出てこず、さびた金の縄や朱や焼き物の蓋が出てきただけでした。この金の縄を手にとってみると、すぐこなこなになってこわれてしまいました。これ以後、鶏の鳴き声は聞こえなくなってしまった。」ということです。

この話は出てくる金の縄は、おそらく金メッキされた馬具や金環だったと考えられる。サビがひどく手にとってみたら、こなこなになったのだろう。

那加手力町の手力雄神社境内古墳は、丘を背景にし、社殿を中心にして東西に二基ある。盛土が、ほとんど完全に残り、横穴式石室を持つ特徴的な円墳である。

手力雄神社境内古墳（たりきおじんじゃけいだいこふん）

西古墳の大きさは直径一八メートル、高さ四メートルで、石室は大きな岩石で組まれ南に口を開いている。東古墳は盛土が崩れていて石室を測ることはできないが、ほぼ西古墳と同じ大きさの円墳である。神社の境内には、これら二基のほかにも数基の古墳があり古墳群を形成している。これらの石室からは、金環・銀環・勾玉・管玉などが多数出土している。

松田古墳

鵜沼松ヶ丘町（鵜沼中学校東）に所在する。直径一二メートルの円墳で、葺石と横穴式石室があった。昭和四六年に発掘調査され、現在は、石組み部分のみが残存している。この古墳からは、組み合わせ式石棺（全長一・六五メートル、幅〇・四一メートル、高さ〇・四メートル）が発見された。

市内に今も残る古墳のほとんどは、未開発の地区や開発の難しい地域に現存する。今まで、開発名のもとに貴重な古墳が、次々と姿を消された。このままでは、いずれ消失する運命にあると危ぶまれている。

表7　各務原市の主要古墳一覧表　（　）内の説もある。

地区名	号番	古墳名	所在地	形	全長(m)	後円部直径(m)	備考	時期
加	1	柄山古墳	那加柄山町	前方後円	八二	五四	葺石・埴輪	四世紀
那	2	南塚古墳	那加桐野町	前方後円	八五	四五	周濠	五世紀前期
	4	土山古墳	那加土山町	前方後円	二九	減失	埴輪・管玉・小玉	五世紀中期
	3	琴塚古墳	岐阜市長森	前方後円	一五八	六八	周濠・葺石・埴輪	四世紀
鵜沼	5	一輪山古墳	鵜沼西町	円	二〇～二八	二〇～二八	三角縁流文帯四神二獣鏡	五世紀前期
	6	衣裳塚古墳	鵜沼羽場町	円（前方後円）	五二	五二	周濠・鼓石・埴輪・琴柱形・石製品・石製斧・石製刀子・勾玉・管玉・臼玉	五世紀中期
	7	功の塚古墳	鵜沼羽場町	前方後円	二二〇	七〇		
	8	金縄塚古墳	鵜沼東町	（前方後円）	三七	三七	直刀・杏葉	六世紀
	9	ふな塚古墳	鵜沼大伝木町	前方後円	四五	二七	周濠・須恵器・鉄器・馬具類・胡簶・挂甲	六世紀末
	10	大牧古墳群一号墳	鵜沼大伝木町	円		三〇		
	11	大牧古墳群四号墳	鵜沼大伝木町	前方後円（前方後円）	二三	一二	減失	六世紀
	12	西町古墳群一号墳	鵜沼西町	（前方後円）	一二	一二	直刀・須恵器（壺・その他）	六世紀
	13	野口南大塚古墳	蘇原野口町	前方後円	約八〇	約四〇	直刀・馬具類	六世紀
蘇原	14	的場古墳	蘇原東島町	前方後円	二〇～三〇	—	減失	
	15	坂井狐塚古墳	坂井町	前方後円	—	減失	須恵器（環身・短頸壺）	六世紀
	16	洞ひさご塚古墳	各務東町	前方後円	約三〇	二〇	減失	
各務原衛	17	郷戸古墳	各務おが せ町	前円（前方後円）	—	一四～一五	減失	
	18	荒井山古墳	前渡北町	前円（前方後円）	三四	二〇	減失	六世紀
	19	大牧古墳群八号墳	前渡西町	円（前方後円）	—	—	須恵器（環身・坏蓋・等）	
	20	オハケ塚古墳	三井町（？）	前方後円	—	減失		

※3号塚古墳は、市域外であるが、関連上掲載した。

四、ウヌマ勢力とナカ勢力

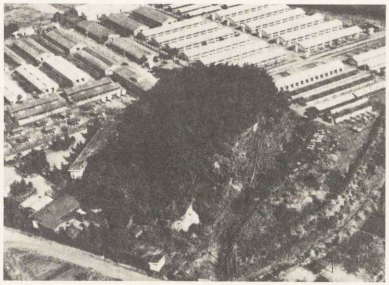


写真35　柄　山　古　墳

古墳時代前期の古墳の分布をみると、大きく二つに分けることができる。一つは、柄山古墳・南塚古墳・琴塚古墳・岐阜市長森）などの前方後円墳を中心とする「ナカ勢力」と、もう一つは、坊の塚古墳（前方後円墳）・衣裳塚古墳・一輪山古墳（いずれも円墳）を中心とする「ウヌマ勢力」である。その他の地域では、古墳時代前期の古墳といわれるものは見つかっていない。したがって、古墳時代前期には、「ナカ勢力」と「ウヌマ勢力」の二大勢力が、各務原台地を挟んで東西に位置していたといえる。

ナカ勢力　前期の古墳には、全長一一五メートル級の琴塚古墳と全長八〇メートル級の柄山古墳・南塚古墳があり、いずれも前方後円墳で周溝を有するものである。この三基の中で柄山古墳が最古のもので四世紀末、ついで南塚古墳で五世紀前半、琴塚古墳が五世紀中頃の順である。（他に土山古墳があるが、すでに消滅していて不明であるが、ここでは前期の前方後円墳と推定したい）これらが「ナカ勢力」の象徴である。

この地域の古墳時代の集落遺跡は、現在のところ発見されていないが、弥生時代の遺跡として、蟷川上流から寺田遺跡・雨池遺跡・雨池東遺跡（岐阜市）・桐野遺跡・芦原遺跡・土山西遺跡（各務原市）など多くの遺跡が分布している。

このことは、蟷川を中心として東の境川、西の岩地川

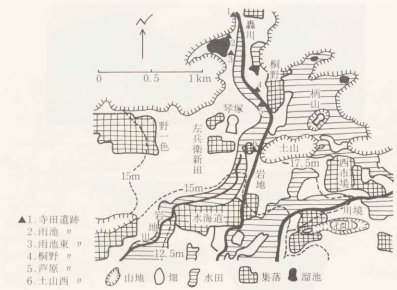


図14　古墳時代前期のようす

流域に広がる低湿地や下位段丘で水稲耕作が行われていたことを物語っている。

「ナカ勢力」は、このような弥生時代からの農業生産力を背景として、大規模な古墳を造営するほどの力を古墳時代前期までに築きあげていたのである。

ウヌマ勢力　各務原台地の東縁部に、県下第二位の坊の塚古墳（全長一二〇メートル）があり、わずかに離れた所には、県下最大の円墳（前方後円墳説もある）である衣裳塚古墳（直径五二メートル）と一輪山古墳が並んで築かれていた。

これら前期の古墳の中の一輪山古墳から、舶載の三角縁波文帯四神二獣鏡が出土している。したがってこの古墳は四世紀末のものであり、衣裳塚古墳は五世紀前半、坊の塚古墳は五世紀中頃の古墳と推定される。これらが「ウヌマ勢力」の象徴である。

この地域でも、古墳時代の集落遺跡は発見されていないが、弥生時代の遺跡としては、宝積寺・鵜沼山崎・八龍・鵜沼第一小学校遺跡が残存している。こうしたことから、「ウヌマ勢力」は、各務原台地の原野を背に、前に広がる大安寺川流域の低湿地や山あいなどの下位段丘の水稲耕作地と生産力と、交通の要所を控えた木曽川流域の生産力を背景にして大規模な古墳を築くほどの力をたくわえていたのだろう。

写真36　須衛古窯跡

写真37　須衛古窯跡出土品

このようにして、両地域とも四世紀末頃から、大和朝廷の勢力圏に組みこまれ、勢力を広げていったのである。

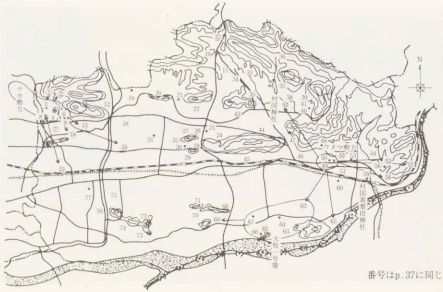
両勢力のはざまで

前期の古墳の分布が見られない二大勢力に挟まれた蘇原・各務・須衛・稲羽の各地区は、後期になると多くの古墳が出現してくる。各務・稲羽地区については、ウヌマ勢力の進出が考えられる。（後述する）

蘇原・須衛地区については、両勢力とは別の勢力を考えることができる。両地区には七世紀からの古窯跡群が多数みられることから、「須恵器製作集団」の移住に注目しなければならない。つまり、両地区には、二大勢力とは別の勢力「須恵器製作集団」が他地域から移住し、須恵器を焼きながら古墳を形成していったと推察できる。

両地区の古墳の概略をみると、蘇原地区では、野口南大塚古墳・坂井狐塚古墳（前方後円墳）の周辺に野口南古墳群や熊田南・北古墳群が分布している。須衛地区の場合でも、郷戸古墳（前方後円墳）の周囲に天野古墳群が分布している。このように新興の地域では、後期の前方後円墳をとりまくように古墳群が形成されており、前方後円墳に葬られた人々が古墳群の盟主として君臨したことがうかがわれる。

つまり、このような古墳を形成していったのが、他地域から移住してきた須恵器をやく人たちであった。当時



番号はp.37に同じ

図15　ウヌマ勢力とナカ勢力の広がり

須恵器をやく人たちは、集団で行動していたのである。

こうした「須恵器製作集団」の技術は、当時の最先端のものであった。従って、彼らは渡来系の人々であると考えられる。渡来系の氏族としては、各務氏が想起できる。各務氏は（文献上では七〇一年、御門国各務郡中里戸籍に各牟勝小牧の名で記載されている）七世紀後半にはかなりの豪族であった。各務氏や「須恵器集団」が、どのあたりに住みつき勢力を広げていったかは未だ不明であるが、ウヌマ・ナカ勢力の中間地域である蘇原から須衛にかけてのどこかであろう。

両勢力の広がり

古墳時代後期になるとウヌマ・ナカ地域周辺にも、古墳が急激にふえてくる。これは、ウヌマ・ナカ両勢力が周辺地域に勢力を広げていったこととつながりがある。

「ナカ勢力」の場合では、土山古墳群・権現山古墳群・山田向古墳群などの大古墳群や、観音寺古墳群・尾崎古墳群のような小古墳群が、周辺の丘陵の山腹や山麓に伸びて分布するようになる。また、浜見塚古墳群や市下古墳群などのように周辺地域へも広がる傾向を示す。これは、「ナカ勢力」の広がりそのものといえる。

「ウヌマ勢力」の場合も同様に、金繩塚古墳、西町古墳群・桑原野古墳群などが周辺の山すそに広がっていき、さらに、宝積寺古墳群や八龍古墳群・大

写真38　村国真墨田神社

牧古墳群といった大群集墳が、木曽川沿いに分布していった。このように「ウヌマ勢力」は、周辺部から順次、木曽川沿いに勢力を伸ばしていった。こうした木曽川流域への進出は、「ウヌマ勢力」が木曽川や古東山道の交通や交易上の要所をおさえ、木曽川の水運を司っていたためと考えることができる。

勢力の拡大とともに「ウヌマ勢力」の中心地は、木曽川沿いの村国真墨田神社のあたりへと移ったのであろう。各務地区にも「村国」の名称を持つ村国神社が所在することから、「ウヌマ勢力」が各務地区へも進出していったことがわかる。稲羽地区については、「ウヌマ勢力」が木曽川沿いに勢力を拡大していったことから容易に察することができる。

このように、木曽川沿いに勢力を伸ばした「ウヌマ勢力」は、ここ大巻山周辺に「大牧一号墳」を含む七〇数基の大規模な古墳群を築いていったのであろう。この地は、共同体を見下ろすのに都合がよく、南に木曽川を望み対岸の地域にも目を向けていったことをうかがい知ることのできる地である。

このようにして、勢力を拡大していった「ウヌマ勢力」は、壬申の乱で登場する歴史上の人物「村国連男依」へとつながっていったのであろう。

第四章　大牧一号古墳

一、地勢と地域的特徴

図16　鵜沼の地域

濃尾平野の北東部に位置する各務原市は、北に権現山・向山・金毘羅山など、三〇〇メートル余の主峰を結ぶ老年期の岩山が連なり、南には木曽川が、愛知県との県境をなして流れている。各務原市の中心部を占めるのは、今から約一万年から五万年ほど前にできた各務原台地（洪積台地）である。

市東部の木曽川沿縁部に位置する鵜沼大伊木地区は、台地の東端に接続する低い小山が並ぶ丘陵地を形成している。鵜沼地区南端に位置し、木曽川を望む伊木山は、一七三メートルの高さがあるが、丸子山（七九・五メートル）がそれに次ぎ、他は小山が連なって波打っている地帯である。

伊木山の西は、丸子山の西端から大伊木の集落が発達しており、その南端の小高い台地上に新しい住宅地である大牧団地と、大牧一号古墳のある陵南小学校が造成され、南北に向いあっている。この丘は大巻山と名づけられている。低い谷をはさんで二つの丘に分かれており、北東に当る丘を北大巻山（現在大牧団地）と名づけられている。南西に当る丘を南大巻山（現在陵南小）と呼んでおり、東にある伊木山に対して西にある山という意味があったようである。今から五〇年ほど前までは、赤松・あべまきなどの樹木が繁っており、たきぎにする木や枝がとられていたようである。その後、開墾されて畑に姿をかえ、十五、六年前まではサツマイモが作られていた。古老の中には、北を「大巻」、南を「小巻」と呼ぶ人もおり、この巻は土地の木曽川との関係を物語っている。かつて、濃尾平野に出る木曽川の谷口が、大山市にあたり、木曽川の急流が大巻山の南斜面の崖にぶつかり、渦を巻いていたことから、大巻、小巻の呼び名が発生したと思われる。昭和十六年の鵜沼土地宝典には、鵜沼村小字名として大牧・小牧を見ることができ、この牧は、巻が変化したものと思われる。

北大巻山の北側には、岩手山麓下の台地が北に伸びており、南西に向かってゆるい傾斜で下り、稲羽地区の水田地帯につながっている。

この鵜沼に人間が住み始めたのは、洪積世約一万～一〇〇万年前の終わりに近い時代である。この時代は旧石器時代と呼ばれ、無土器時代であり、星塚・植野・蛭振などからナイフ形石器（約一万八千年前）が発見されている。三ツ池では縄文中期の住居址である「炉址遺跡」（約五千年前）が発掘・復元されており、他に星塚・防風林・三ツ池・丸子山・植野など多数の縄文遺跡が確認されている。

ついで水稲栽培が始まると、人々は北部山麓の湿地や木曽川北岸に集落をつくり、やがて古墳に象徴される地

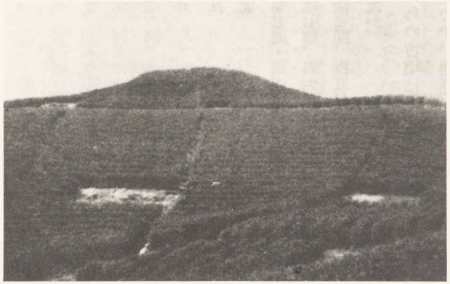


写真39　独立丘の頂上にある「大牧一号古墳」（昭和40年当時）

図17　鵜沼の古墳群

方豪族が登場し、四、五世紀には大和朝廷の支配下にくみこまれていった。

二、鵜沼古墳群と大牧古墳群

初め首長墓として出発した古墳も、五世紀後半から六世紀にかけて、近畿・西日本を中心として、全国的に群集墳が出現している。群集墳とは、一定地域に等質的な内容の古墳が、短期間に多数形成される古墳群であり、直径一〇メートル内外の小形円墳が横穴式石室を主流として、山腹や丘陵地上に出現してくる新しい墓制である。

これらの古墳は、いずれも狭い範囲に、一〇基前後から数一〇基、時には数一〇〇基の小円墳が密集して築かれている。このような小円墳群は、六世紀以降、およそ一〇〇年の間に集中的に築かれていることから、古墳として新しいだけでなく、かつての大形古墳のように、何一〇年かの間をおいて、一世代に一古墳を築いた最大規模の首長墓とは異質のものである。

このような群集墳の出現から、社会的地位がそれほど高くない人まで、古墳づくりの仲間入りをするようになってきたことが理解できる。

また、古墳前期に使われていた竪穴式石室や粘土槨な

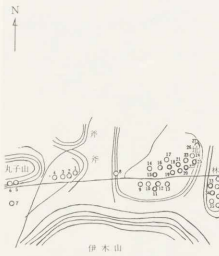


図19　伊木山北・東ふもと古墳群

図18　宝積寺古墳群

どの埋葬施設は、粘土で厚くおおわれ、死者が封じ込められていたが、この時期に一般化し始める大陸系の横穴式石室は、外界に通じる出入口を持ち、一石室内に順次死者を追葬することのできる複次の墓制で、いわゆる家族墓的性格を有している例が多い。そこに納められていた副葬品には、生活用具としての実用品が目につくことから、ここを死後の世界の場と考えたようである。

各務原市の鵜沼地区においては、宝積寺・桑野原・西町・伊木山東北・丸子山・矢ケ上・文字・北岩手中下・南岩手中下・北大巻山・南大巻山に各古墳群が認められている。

北大巻山では、六基、南大巻山では二九基が昭和初期の調査で確認されており、大巻山周辺部の古墳を合わせると、総数七四基の大きな古墳群を形成している。

現在は、開発が進み昔の様相をとどめず、ほとんどの古墳が消滅している。

しかし、ところど

写真40　南岩手中下古墳群址の河原石

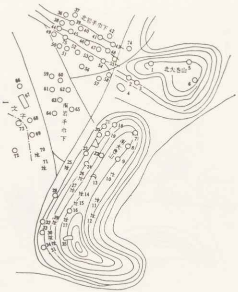


図20　大伊木西南部の古墳群
（1が現在の大牧一号古墳と推定67がふな塚古墳）

ころに古墳に使用されていた河原石が、現在の畑の境や垣として使われており、わずかに昔の面影を留めている。古老によると、これらの古墳は開墾により封土はならされ、古墳の石組みに使われていた岩石は運び出されたり、河原石は各所に積み上げられたり、穴を掘って埋められたりしたと言う。また、この地域一帯からは、須恵器片の出土がみられ、南岩手巾下六四号墳からは、昭和四十一年に長さ六七センチの直刀が発見されている。このことからも、古墳が木曽川べりの小伊木から大伊木にかけて最も多く集中していることが理解できる。この大牧古墳群は、大伊木の西隣りの稲羽地区の西洞山古墳群につながっており、古墳群の分布は、木曽川を下って西洞山で終わっている。西洞山では十数基あったうちの四基が、昭和四十一年に住宅地造成のために発掘調査され、経一〇メートル・高さ二・五メートルほどの小円墳が検出されている。

写真41　西洞山古墳

三、大牧一号古墳

写真42　上空からみた大伊木西南部

㈠古墳の現状と周囲のようす

大牧一号古墳は、各務原市十六番目の小学校である陵南小学校建設用地の造成に先だち、記録保存するために、昭和五十七年十一月より、五十八年三月までの期間をかけて、各務原市教育委員会の手によって発掘調査が行われた。

本古墳は、各務原台地の南縁につながる木曽川北岸の丘陵上に造られている古墳である。周辺の大伊木西南部は、前資料からも判るように七四基もの古墳群が形成されており、西方約三〇〇メートルの台地端には、美濃における終末期の前方後円墳である「ふな塚古墳」（全長約六〇メートル・後円直径約三〇メートルと推定）が存在している。

大牧一号古墳は、発掘調査の結果、六世紀末（今から一四〇〇年ほど前）の直径約三〇メートルの大形の円墳であることが判明した。この地域の大多数の円墳丘の直径が、八〜一〇メートルの小円墳

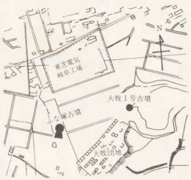


図21　(右は、昭和46年の記録)
(左は、昭和40年の記録)

一、径一二間・高一〇尺・完全
二、径七間・高八尺
三、径七間・高七尺・不整
四、長一三間・巾東南七間・西北八間・高一二尺・東南端を毀す
五、径五間・高三尺
六、址、川石・齋瓮散乱

北・大・巻・山一号・墳・岩手幅下と大巻の境界に営まれた山上古墳です。封土の高さ四m・直径二六mで円錐形の美しい形をしています。封土は、ほぼ原形ですが、山林を拓いて耕地としたため、崩れやすいようです。発掘した形迹は無いが、西側の封土の裾に須恵器の破片が落ちていました。これは坏の蓋と身の破片で、いずれも六世紀前半のものです。

北・大・巻・山二号・墳・一号墳の南西の麓にあり、直径約一四m・高さ二m、墳丘内部の石組に使っていた川石は現在石垣に使っているが、岩石も少し残っています。封土は低くなったまま円墳の形を遺しています。

北・大・巻・山三号・墳・遺址は不明です。

北・大・巻・山四号・墳・川原石が遺っています。

北・大・巻・山五号・墳・川石が散乱し、石垣に使っています。

北・大・巻・山六号・墳・川石が散らばり、石垣に使用されています。

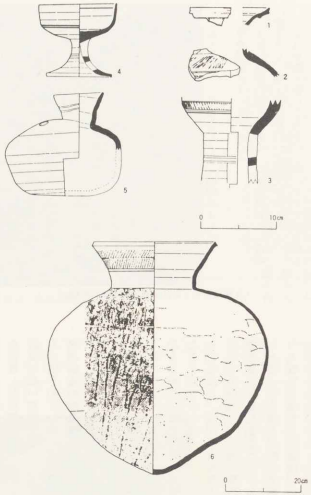
群であることから考えても、大牧一号古墳は、ふな塚古墳とともに大牧古墳群の中心的存在といえる。

大牧古墳群は、六世紀前半から築造が開始され、七世紀まで続いたようであるが、本古墳は、古墳の形状や構造、出土品からほぼ六世紀末に造られたと考えられる。また、大牧一帯の古墳群の各古墳は、市内の他地域と異なり、前庭部や羨道部、さらに玄室にも河原石を多数使用していることが特徴である。

この大牧一号古墳（円墳）の存在は、すでに昭和六年の岐阜師範学校小川栄一先生の調査で、上記のごとく古墳の概観は判明していた。そこには、径が約一二メートル・高さ約六メートルの円墳と記されている。

さらに、昭和四〇年の郷土史家古岡勲先生の踏査では直径二六メートル・高さ四メートルの美しい円錐形との記録が残っており、後期の円墳としてはかなり大きい規模のものであることが知られていた。また、岐阜県及び各務原市の遺跡台帳と地図にも明記されており、今回の発掘まで内部不明のまま現状保存されてきた。ただ開墾のため墳丘の上部は削平され、石室の上の盛土が比較的浅いことが認められていた。

各務原市史によると、北大巻山・南大巻山の古墳群の封土の裾より、須恵器の破片が数点発見され、次頁のような須恵器の形状が報告されている。



1．須恵器壺（口縁部破片）
2．須恵器壺（肩部破片）
3．須恵器器台（体部中位）
4．須恵器高杯（器高9.6cm）
5．須恵器平瓶（器高13.6cm）
6．須恵器甕（器高61.5cm）

図22　大牧古墳群よりの出土品（須恵器片）

第一古墳群

鶴沼大伊木町四丁目（字大牧）に所在する。

北大牧山に立地し、六基の古墳が確認されているが、現在一号墳～三号墳のみが残存している。

外形　一号墳～円墳。直径約四〇m、高さ約四m。二～三号墳～円墳。直径約一三m、高さ約一m。墳丘はほとんど削平されている。四号墳～墳形不明。長さ約三三・四m、南東幅約一二・六m、北西幅約一四・四m、高さ約四m。五～六号墳～円墳。直径約九m、高さ約一m。

内部主体　不明。

出土遺物　一号墳封土より（図22の1・2）。

須恵器壺（1・2）

1は口縁部の破片である。口縁部外面に二段の稜を有し、頸上部に斜行ヘラ描文がみられる。2は肩部の破片である。上部にタタキ痕を残し、下部に二本の沈線をめぐらす。

「各務原市史」（考古編）より（発掘前の状況）

発掘以前の、これらの記録からもわかるように、市内各所に分布している古墳群の中にあって、陵南小学校に立地している大牧一号古墳は、古墳後期の他の小規模な円墳と比較して、その規模・構造・副葬品そして被葬者を安置した石棺の発見からも、歴史的、文化財的にみて価値が高いだけでなく、この地に大和朝廷と結びつきをもつほどの、かなり有力な豪族のいたことを示している。発掘調査の結果は、本市の小国家形成の謎を解く手がかりとしても重要な意味をもつものである。

また、この地域一帯の中で最も高い所に位置する山上古墳であり、見晴らしがよく周囲からも目立つ所に築造されている立地条件から考えても、被葬者は、木曽川対岸も含めて、この地方一帯を治めていた中心人物であったことがうかがえる。

すなわち、六世紀末のこの地方の最有力の首長であり、周囲の小円墳や、付近一帯の単位群の始祖につながる人物の墓とも考えることができる。

大牧一号古墳と同時に発掘された、陵南小学校敷地内の大牧二号墳や三号墳は、いずれも径八メートルほどの小円墳であり、石室と、小円墳の割には長い羨道部は、すべて河原石で造られており、大牧一号古墳や、ふな塚古墳にも多数の河原石が使用されていることからも、同一系譜のものと考えることができる。

さらに南大牧・岩手巾下・一文字の各古墳群はいうに及ばず、大伊木他地域の古墳群との系譜や勢力範囲とも何らかのかかわりがあったものと考えられる。

このように見てくると、同じような様態をとりながら場を移し、墳形を変え、埋葬施設や被葬者の層や数をも変遷させながら流れていったと思われる大伊木一帯の古墳群は、まさに「地域の表情」であるといえる。

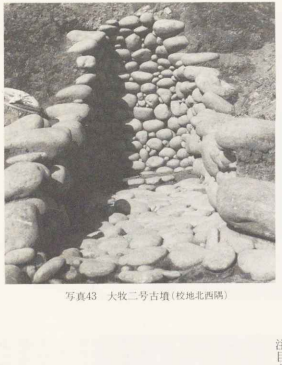


写真43　大牧二号古墳（校地北西隅）

今ひとつ注目せねばならないことは、学校の北東にあたる大伊木二丁目に「大伊木山西古墳」（六世紀）が存在していることである。この古墳は、墳丘が流出し石室が露呈しているものの、直径一八メートル・高さ三・五メートルの横穴式石室を有する円墳である。石室と羨道部がはっきりしており大伊木一帯の古墳群の中にあっては、規模が大きく、構造もしっかりしている。

そしてさらに、大牧一号古墳の発掘調査後、にわかに注目をあびてきたのが、先にも触れた学校の西隣りにあ

写真44　大牧三号古墳（校地南東隅）

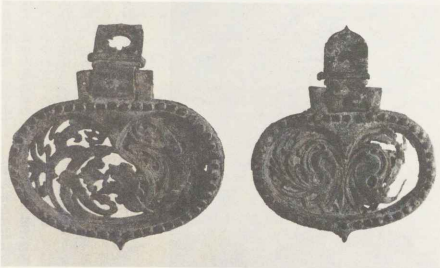


写真45 「ふな塚古墳」出土の杏葉

る一文字古墳群中の「ふな塚古墳」である。昭和五十九年より発掘調査が各務原市教育委員会によって進められている古墳である。

この古墳は、すでに大正八年頃、煉瓦工場の土取りで封土が削り取られ、外形ははっきりしないが、現在、東半分は残っており、今回の調査で石室が検出されている。特に本古墳からは、土取りの時に発見されたという極めて立派な「杏葉」が二個あり、現在、岐阜市歴史博物館に展示されている。杏葉とは、馬の鞅に革緒で結び下げた装飾馬具のひとつである。一個は蟠龍文で、縦九・一センチ、横一〇センチの大きさをもち、ビョウは共に四・五センチで、全面に金箔を施した見事なものである。

今回の調査で、全長約六〇メートル・後円部の直径約三〇メートル・二段築石の、後期としては大形の前方後円墳であることが判明した。石室の壁はすべて大きな河原石で構築されており、天井石がのせられていたが転落し、家形石棺を破壊していたことが確認されている。

したがって、時期的には大牧一号古墳と同時期の六世紀末のものと推定されているだけに、大形円墳である大牧一号古墳とのつながりを十分考えることができ、近接している分だけに、密接な関連のある首長の墳墓としてとらえたい。

史料的価値高い二号墳葺石

県考古学会　各務原市大牧の古墳を視察

昭和59年6月
『中日新聞』
の記事より

前方後円墳と確認

各務原市の大牧西二号古墳

全長60メートルの中型

(二)発掘の経過

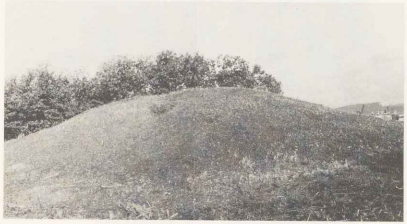


写真46　発掘前の古墳全景(東側より)

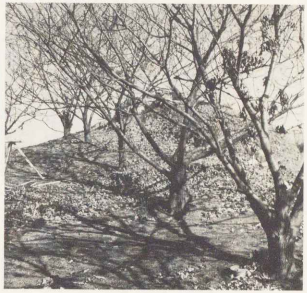


写真47　発掘前の古墳全景(西側より)

各務原台地の南縁に点在する独立丘陵のひとつである北大巻山(標高五六メートル)に立地する大牧一号古墳の発掘前の状況は、ヨシが茂る雑木であり、西側の一部は栗林にかかったなだらかな小山状の「塚」であることは、古くから地元でも知られていた。墳丘の南斜面上部(墳頂部)に盗掘穴のあることが下刈りによって認められ、後世に盗掘されている痕が確認された。

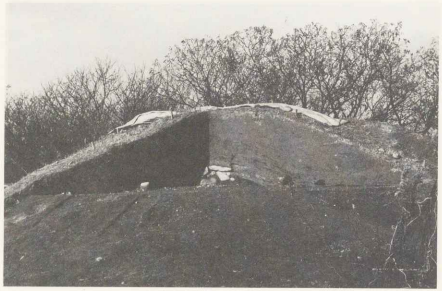


写真48　墳丘部を除去した正面部

下刈りの後、墳丘のボーリングにより、墳頂より約一・五メートル下に天井石のあることが確認された。墳丘の南側の盛土を除去し、石室の天井石を露出させ、死者を葬る玄室の外郭がつかまれた。そして崩壊せずに南に伸びる羨道部が掘り出され、さらに羨道に続く前庭部が検出された。

前庭部は、近くの木曽川の河原より運ばれたと思われる河原石が両側壁に積み並べられていた。しかし、床面は、直接土を掘った素掘りで、何も敷かれておらず、石室への入り口である羨道部に向かってゆるやかに上へ傾斜しており、さらに、羨道部から玄室までは河原石の敷石が伸びていることが確認された。こうして、玄室の天井石や側壁の石組みは、移動や転落することがほとんどなく、羨道部と前庭部も玄室同様に、原形のまま発掘された。

墳丘の大部分は、自然地形の削り出しで、丘陵地をうまく利用した、古墳の築造であることがわかった。墳丘の両袖の地層は丘陵の地層と一致しており、石室土部にわずかに盛土している浅いものであることも確認された。特に、天井石に巨石を用い、かつ規模の大きいことから、本古墳の構築法や各部の特徴など、これからの調査の上で注目すべきことがらが明確になった。

墳丘の裾の調査では、葺石や、裾を囲む列石などは検

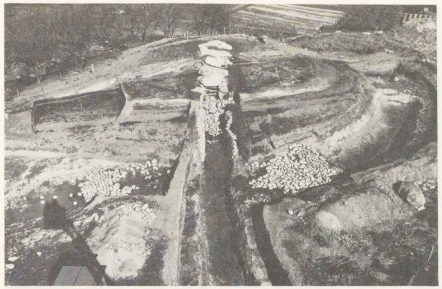


写真49　発掘状況の全景

出されなかった。

前庭部の先は、墳丘端より墓道が南に一直線に伸びていたが、工事の関係で十五メートルほど伸びたところでカットされたが、かなり長かったようである。なお墳丘の周囲には、墓道で切断された周濠が東西に設置されていた。

これらの発掘が進められる中で、本古墳の中心部である石室は、自然の土層である基盤を掘り込んだ土壙内に、長方形のコ字状のプランで造られており、土壙壁が石室の側壁を支える岩石を主体にしながらも、大小の河原石との組み合わせで巧みに構築されていることが判明した。天井石に使われている巨石は、自然の基盤面上（土層）に懸っているので、天井石の荷重は土にかかるようになっていた。この構築方法は、玄室の天井が高い石室の場合に、より効果的な構築法であるといえる。

したがって、このような石室構築の仕方は、傾斜面あるいは丘陵の尾根上において可能な方法であって、平地に造られることは少なく、石室床面が墳丘底にある横穴石室では、一般的なものであることが指摘できる。

しかし、何といっても本古墳の価値を決定づけたことは、玄室の中央に安置されていた「石棺」の発見である。玄室内部は盗掘で荒らされており、石棺の蓋の一部は割られ、棺の下にはずされていた。しかし、石材を組み合

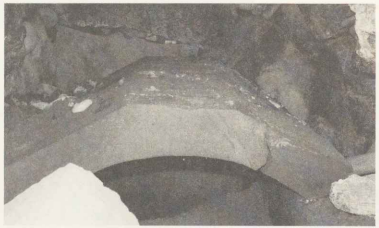


写真50　出土した「家形石棺」

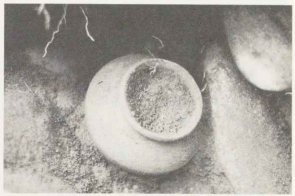
わせた「家形石棺」がほとんど完全な姿で検出されたことは、大発見であった。

石室内調査は千四〇〇年余の間に床面の上に積もった約八〇センチほどの落土を取り除き、床面の全面を現わして行われた。

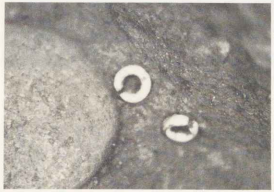
このことにより、石室の内部の構造のようすが全て姿を現わし、床面の敷石の配列や、この敷石が南にゆるやかに上がりながら羨道部に続き、羨門（せんもん）の所で南に開口した極めて堅固に築造された保存のよい古墳であることが確認された。本古墳からの出土遺物は、最も貴重な家形石棺をはじめとして、盗掘されていたとはいえ豊富であり、須恵器の他に、武器類・武具類・馬具類・装飾品などがあり、これらの被葬者の副葬品から、当時の生活状況や死者の生前の地位をしのぶことができる。

なお、玄室と羨道部の境にある玄門付近には、敷石の下に縦に走る排水溝の存在も認められたが詳細は不明。

ここでは、発掘経過の概略しか触れることができなかったが、発掘の詳細については、各務原市教育委員会において現在「発掘報告書」がまとめられている。古墳の形状や構造、副葬品などの特徴からみて、古墳時代後期の実態を知る上でたいへん貴重な古墳であり、学術的にも高い評価がなされている。したがって、より正確な築造状況やその特徴、さらに古墳についての分析や考察の発表が待たれている。



①粕類壺出土状況



②金環出土状況

③ガラス玉出土状況

写真51　床面からの出土状況

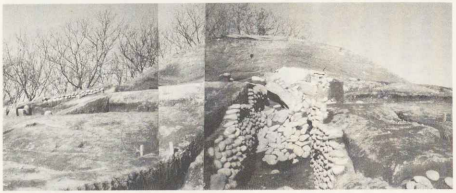


写真52　古墳全体の姿をあらわした大牧一号古墳

(三)遺構のようすと特色

構造

本古墳は、木曽川北岸の北大巻山(上位台地)に立地する古墳後期のものであることは前にも触れたが、「横穴式石室」を主体部とする「家形石棺」を有する、六世紀末の堂々たる「大形円墳」である。丘陵地形をうまく利用して土壙内に石材を組み合わせて石室を構築し、羨道部・前庭部・墓道・周濠など種々の施設を備えている。

墳丘の直径は約三〇メートル、高さは約五メートルあり、古墳時代後期の円墳としては大規模なもので、形状もよく整えられている本格的な古墳である。墳丘の西側の末端部は、丘陵地層につながっており、完全形では独立していないが、全体としてはゆるやかな丘状を示しており、裾が長く流れたいへん美しい形をしている。

墳丘には、葺石や墳裾の石列などはなく、現在の石垣は、土止めのために、復元時に整備されたものである。墳丘の周囲には、幅約五メートルの周濠(空濠)がめぐらされていたが、西側では検出されていない。したがって、専門家によっては、前方後円墳の「後円部」にあたるのが大牧一号古墳であるとの説が紹介されているが、各務原市教育委員会により「円墳」と判断され、昭和五十九年六月二十六日に市史跡に指定されている。

写真53　墳丘からのびた墓道

石室は、真南に開口しており、遺体を納めた玄室の中央部より、真っすぐに羨道と前庭部とが伸びているが、羨門付近が最も高くなったゆるい傾斜をもつ通路になっている。その延長線上に、墳丘端より一段下がってさらに長い墓道が伸びている。

玄室入り口には、玄門（入口の袖石）が形成されており、羨道部の入口には、大きな羨門（石室への入口）が配置されている。古墳各部がそれぞれ明確に区分された典型的な特徴を有している古墳である。また、玄室と羨道部の床面には、河原石が敷かれており、側壁は、大きな山石を組み合わせて、堅固に構築されている。

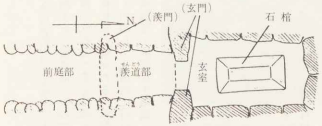
しかし、外に出ている前庭部の側壁には、河原石が整然と並べられていたが、床面には何も敷かれておらず、玄室や羨道に比べ大きな相違点が認められる。

このように、本古墳の造りは、全体的に偉容性と変化、さらに装飾性が認められ、すでに設計段階から、権威づけのための意図があったように推測できる。

また、墓道が一周濠をたち割って造られていることは、全国的にも珍しい遺構である。

その周濠の一部には、石積みが検出されているが、墓道によって東西に切断されている周濠の両端には、河原石が積みこまれていることも、単に水止めのためだけではなく、前庭部の側壁の河原石と共に、装飾性を感じる。

このような施設をもった本古墳の玄室は、南北に細長い奥行のある長方



形であり、羨道から玄室へ入ると左右が広くなっている「両袖式横穴石室」の様式を有している。また、大形の石材で構築されている両側壁の大石の間には、大小さまざまの河原石が詰め込まれ石組みを安定したものにしている。

玄室の中央部に安置されていた大形の一組み合わせ式家形石棺」は、棺蓋（屋根型）・棺の本体（身）・棺床は、それぞれ別々に造られており、加工された凝灰岩の石板が組み合わされている。

写真54　羨道部の閉塞状況（玄門付近）

なお、玄室に通じる羨道部は、ぎっしりと河原石を積み込んでふさがれており、外部と遮断することによって玄室を密閉し、その神聖さを保持していた。

これらのことから、陵南小学校に現状保存されている本古墳は、その構造や出土した家形石棺ともに岐阜県下で一級品の古墳であり、単に学校の生きた教材としての活用のみでなく、一般にも公開されていることは、郷土の歴史や文化財の学習にも広く役立っており、専門家の研究資料としても話題を呼び、注目されているところである。

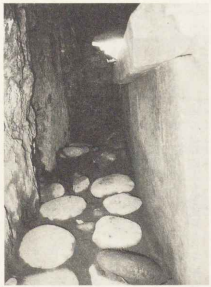
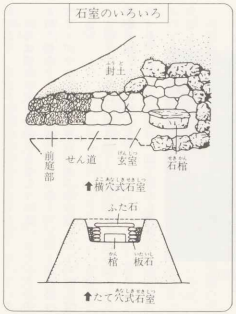


写真55　玄室内部（石棺と側壁の間）

横穴式石室

大牧一号古墳がもつ古墳後期の特徴である「横穴式石室」は、朝鮮において成立した墓室で、五世紀後半から六世紀初めに日本に波及したものである。おそらく、朝鮮からの渡来集団、あるいは朝鮮におもむきその墓制に触れた人々がもたらしたのであろう。

最初、北九州に伝わったのち、六世紀に入ると畿内や吉備（岡山）地方に築造され始め、六世紀中頃以降になると東北地方南部より九州南部にまで広がっている。特に日本の場合は、一個の墓室が複数埋葬を前提とする閉鎖装置をもつ点が特色である。



古墳前期の木棺を竪穴式石室に納め、蓋石を置き、粘土で密閉する従来の葬法に比べると、その間に石棺、とくに家形石棺を置くようになったことは、大きな変化である。しかも、石室内を立って歩けるほどの高さと空間を墓室に与えていることが、横穴式の特徴である。

このような広い空間をもつ墓室への転換は、死後の世界に対する考え方の変化を意味し、広くなった空間には須恵器に納められた飲物・食料が供えられるようになった。これは、石室を死者の家と考え、死後の世界でも生前と同じような生活が続くと考えられるようになった現れである。また、一族の追葬による家族墓として死者の霊が墓室を共有する思想をもち始めたのではないと考えられている。

美濃地方における横穴式石室は、木曽三川によって形成された濃尾平野をとりまく山麓や河岸段丘上及び土岐川流域の山間部に至る広範な分布が知られている。その地域的特徴や石室づくりにたずさわった工人組織の研究は、ほとんどされていないのが現状である。

わずかに、「美濃地方における横穴式石室の型式と変遷について」（岐阜史学・第七九号）の成瀬正勝氏の論文でしか、横穴式石室については調べられていない。

それによると、横穴石室は、基本的には死者を葬る玄室と、それに至る通路としての羨道部からなり、さらに墓

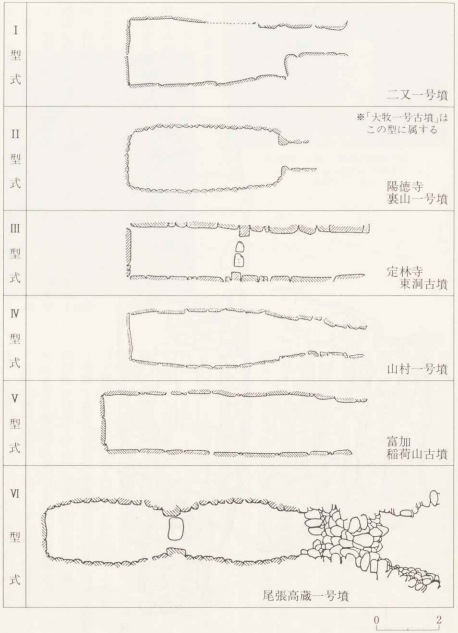


図23　美濃地域の石室型式（成瀬正勝氏の論文による）

道及び墓前の付属施設が付設されると規定し、美濃地方の横穴式石室墳は、内部構造不明のものや、すでに消滅して記録に残らないものを含め、約三〇〇基（岐阜県教委『岐阜県遺跡地図』昭和五十一年）が確認されているが、内部構造をチェックしうるすべての横穴式石室を検討分類されたものが、前ページの六型式の分類図である。ここでのポイントは、玄室と羨道部の連接状態にある。大牧一号古墳の場合は、羨道が玄室の前面中央部がせばまる両袖式石室（Ⅱ型式）にあてはまる。

さらに、石室幅をよく調べると、玄室幅（奥端部約二五メートル・前面部約一一メートル）は、玄門部（約一二メートル）・羨門部（約一三九メートル）・前庭部墳丘端（約一一・九六メートル）と比較して広く、玄室への入り口の玄門部が一番狭くなっている。

また、玄室の平面図は左図の通りであるが、古墳時期の初期においてはしばしば正方形を示すものが採用されるが、終末に近づくにつれて玄室の主軸の方向に長い長方形をなして、長辺と短辺との差が広がってくるのが一般的である。大牧一号古墳の場合は、厳密には玄室の奥端部が前面部より約四〇センチほど長いので、長方形とするより奥が広がる台形をなしているといえる。

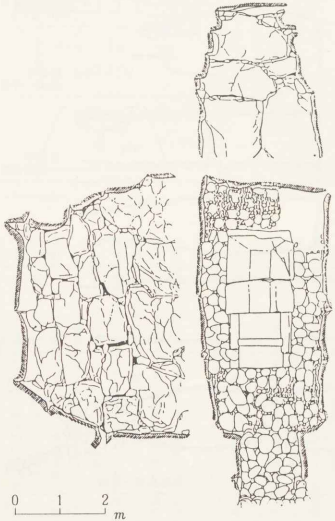


図24　玄室及び羨道の実測図（両袖式横穴石室）

写真56　玄室と羨道の連接状況
（玄室が玄門より両側壁とも広がっている）

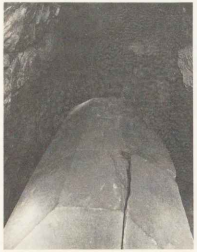


写真57　奥壁状況

本古墳の玄室規模をまとめると、玄室長約五メートル・最大幅約二・五メートル・天井高約三・五メートルの大きさで、前部の両壁は、羨道端の玄門部より袖状に約四五センチずつ外側に張り出している典型的な両袖式の横穴石室で構成され、床面は奥に広がりを示している。

この玄室は巨石石室のおもかげを残し、利用されている石材は、大形のチャートと砂岩であり、側壁は矩形の角張ったチャート材で、天井石は表面が平滑な砂岩中心で四枚のうち一枚だけはチャート材である。五枚の奥壁は、基礎部の一枚と最上部の一枚は砂岩材で、中段の二枚はチャート材である。配置する部分の目的、機能によって石材の選択が行われたと思うが、その理由については不明である。ここに使用されているチャート材は、市内北部山地より産出するが、砂岩材は、隣接する犬山市東部から東濃地方産出のものと推測される。

奥壁には、いわゆる鏡石と呼ばれている巨石を用いず、約一・五メートル×一メートルほどの石が五枚三段積み

玄門東の上部に盗掘穴が認められる

写真58　側壁と天井石の構築状況

にされ、最下段の二枚の石は門柱状に立てられている。

それに対して側壁は、両側壁とも四段積みで、東西が対称的に同じような石組みとなっている。最下段は四個の大きな山石（約一・三メートル×約一・一メートル）で側壁を支えている。しかし、側壁全体を構成する石の大きさにばらつきがあり、全面にわたって石を横長にして組んでおり、上部ほど石は小さくなり、大小の石を巧みに組み合わせている。さらに石と石の間には大小さまざまな河原石を詰石に利用し、石組みを安定させていることが目につく。

さらに、玄室の空間をみると、床面の幅が最大で、天井に向かって狭くなっている。「梱型形式」をとっている。この型式は、空間を奥に伸ばす工法に用いられ、外へ向かって広がるイメージはないが、静的で整った美しさをもっているのが特色である。側壁に対して天井石のかかりが少ないのに、千四百年ほど経過している現在まで崩壊することもなく保存されていることは、当時の工事にたずさわった工人たちの設計や構築上の工夫が認められる。

天井石は、玄室全体を四枚の扁平な山石でおおい、長さ約三メートル・幅約一・六～一・七メートル・重量四、五トンの「巨石」で、本古墳の使用石材中、最大である。四枚とも大きさは均等化されており、天井の架設状況は、側壁が支えながらも、三、四〇センチは土壌に懸っている。このことからも、石の採取・加工・運搬・構築に、かなりの時間と手間がかかっていることが考えられる。

写真59　石棺と床面状況（現在の敷石は手が加えられている）

床面は、羨道部と同じように河原石を敷石に利用しているが、床の外側の隅石は、扁平で大きいものを一列に並べており、奥端部のみは四列の配石がみられる。その他の部分には小石を不ぞろいに敷きつめてあり、ところどころに基盤面である土が表出している。また床面は一枚のみで、追葬のための二次的なものは認められなかったとのことである。

このように大牧一号古墳の玄室は、単室であるが奥行は石棺を収納するために長く、一人の首長を葬るのに十分な広さをもっている。今まで触れてきたように、本古墳の立面構成の大きさや堅固さ、変化の点からも、当時の首長の力をうかがわせると共に、美濃地域独自の技法をもった工人組織の活躍を十分考えることができる。

石　棺

大牧一号古墳を最も価値づけた凝灰岩製の「組み合わせ式家形石棺」が、玄室のほぼ中央部に納められている。

石棺の分類は一章でも触れているが、一般に舟形・長持形・家形の三種類に分けられる。舟形は、かなり散在的に各地の主要な前半期の古墳に用いられ、長持形は、近畿地方で五世紀代の王墓とわずかな地方の同時代の有力古墳に、そして家形は、主に後期の主要古墳にそれぞ

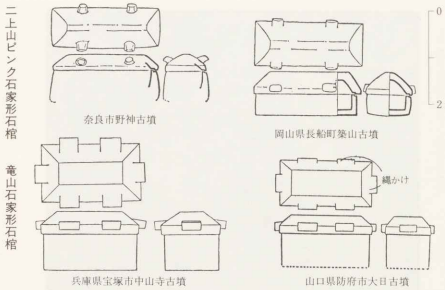


図25　同一石材による石棺の対比

れ使用されている。当初は別抜家形石棺であったが、大牧の場合は石棺製作に適した加工のやすい軟質の凝灰岩を利用した組み合わせ式で、板状の石を組みたてたものである。形状は寄棟造の家形（屋根形）である。

なお　昭和六〇年七月下旬から発掘調査された聖徳太子に関係する人物の墓として話題を呼んだ飛鳥斑鳩の、「藤ノ木古墳」（直径四〇メートル・高さ四メートル・六世紀中頃の後期古墳・円墳）から発見された石棺も、家形石棺である。しかし、家形といっても上図のように多くのものは、屋根の形をした蓋に「縄かけ」がついており、通常四～六個の突出部が認められるが、本石棺の場合は全くついていないのがひとつの特徴である。

大牧の石棺の大きさは、長さ約二・四メートル・幅約一・二メートル・高さ約一・三メートルであり、表面には部分的に朱色の顔料（主成分は酸化鉄で赤鉄鉱を含んだ赤色の粘土を焼いてつくる）が塗られている。石棺の全面に塗られていたかどうかは定かでないが、現在残存している朱は、棺蓋の裏側や身の組み合わせ部分など石板の境目に認められることから、恐らく装飾的な意味よりも死者への魔除けや鎮魂のために施したものと考えられる。また財物の家という観念のほかに、家そのものに対する特別な霊力を意識していたのかとも考えられる。

各務原市において石棺を出土した古墳は、現在のところ大牧一号古墳を入れて五基あり、そのうち現存している石棺は、「弧塚」石棺（鵜沼西町）とふな塚石棺を合わせて三棺である。残されている記録を使い、各石棺の規模を整理し比較すると上図のようになる。

この比較からもわかるように、大牧の石棺は大形であり、蓋と身の形状がとても整っており、極めて美しく製作されている。棺蓋は寄棟状で、最上部は平たく削られ表面は磨かれており、全面にわたって精巧な加工の手が施されている。

さらに、石棺の床面は四枚の敷石板が並べられ、この家形石棺の豪華さを物語っており、県下最大級の石棺といわれるゆえんである。

古墳名	所在地	時代	石棺型式	規模			
山日向	那加長塚町3	6世紀後半	家形	全長 約2m 幅 約0.8m			
松田	松ヶ丘町3	6世紀後半	組み石	全長 約1.65m 幅 約0.41m 高さ 約0.4m			
狐塚	鵜沼西町4	6～7世紀	家形（凝灰岩）	蓋	（全長）約1.97m	（幅）0.95m	（高さ）0.34m
				身	約1.93m	0.82m	10.16m
ふな塚	大伊木町4	6世紀後半	家形（凝灰岩）	天井石が落ち破損 全長 約2.4m 幅 約1.3m 高さ 約0.9m（推定）			
大牧一号	大伊木町4（陵南小学校）	6世紀後半	家形（凝灰岩）	蓋	（全長）約2.5m	（幅）1.3m	（高さ）0.4m
				身	（全長）約2.36m	（幅）1.2m	（高さ）0.9m

各務原市内出土の石棺

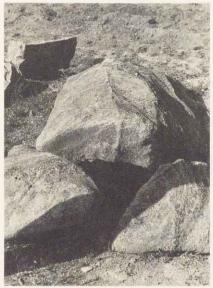


写真60　弧塚石棺

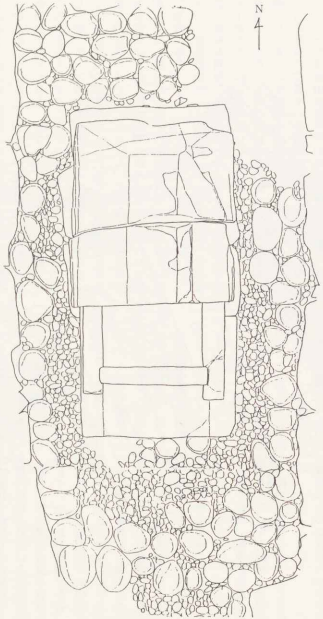
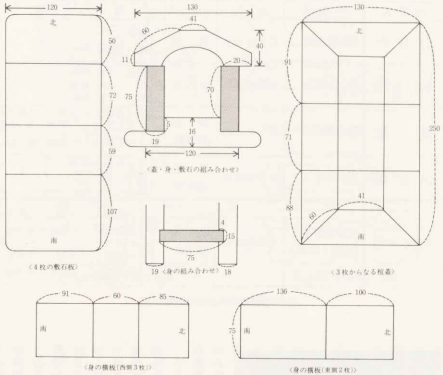
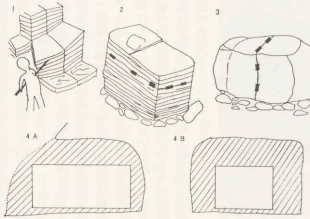


図27　玄室の石棺・床面の実測図



石棺各部の構成(単位cm，学校での実測)



1：鉄棒で板状節理の割れ目を広げて石材を得る。
2：板状節理の顕著な転石の周囲に矢穴をあけ，矢を入れて割る。黒い四角形は矢穴。
3：節理のある塊状の転石に矢穴を周囲にあけ，矢を入れて割る。黒い四角形は矢穴。
4A・4B：鹿谷寺跡付近に残る石材の切り出し跡。斜線部は露岩を削った跡。Aは横から見た図，Bは正面から見た図。

図26　石材の採取模式図

大牧の石棺の加工の精巧さは、前頁の図でも理解できるが、どの面にも平ノミや丸ノミで削り、加工した痕がはっきり残されており、最後に表面を磨いて滑かに仕上げていることからも、首長のために石棺造りをした工人たちがどのような人たちであったかは不明であるが、製作技術のすばらしさと、かなりの月日をかけて作製した努力のあとをうかがうことができる。

したがって、本古墳の西方にあるふな塚古墳から出土している金銅製の杏葉のすばらしさや、同じような家形石棺が発見されていることからも、この両古墳の被葬者である首長は、何らかの形で大和政権とのかかわりや、接触があったと思われるほどの有力な首長であることが改めて想像できる。

また、狐塚石棺と、大牧石棺、ふな塚石棺は、共に凝灰岩の石材を利用していることも、他地域との交流や交易の上からたいへん興味深いことである。

現在のところ、石棺の石材がどの地域から切り出され、運搬されてきたか断定されていないが、近いところで犬山市の東方に位置する善師野が有力である。その根拠として、一つは犬山市善師野が凝灰岩を石材として産出している時期が六世紀頃より始まっていることが文献にみられ、江戸時代中期から明治初期にかけて最盛期であったことが判っている。今一つは、鵜沼地区の一般農家の風呂たきのかまどの石組みに利用していた石材が、善師野よりきていることなどから、その地域との結びつきが推測できる。他には凝灰岩を含む地層から考えると、東濃の可児市方面からの木曽川を利用しての搬送も十分考えられる。天井石や奥壁に利用されている砂岩の産地と一致することからも、石材の産地に石室や石棺にたずさわる工人たちが活躍していたことが推測できる。

石材の凝灰岩は、火山噴出による火山灰・火山砂・火山礫等が集積、凝結してできた灰色の堆積岩のひとつである。この石質はもろいが柔らかくて軽く、加工しやすい利点があり、全国各地で利用されている理由である。

大牧石棺は、先にも触れたように見事な造りではあるが、線刻や彫刻図形、彩色模様こそないが、朱は塗られていた形跡のあることから、宗教的性格を有していることは確かである。

朱塗りの立派な石棺に死者を納め、堅固に築造された広い空間をもつ玄室に安置し、ひたすら鎮魂と妖魔退散を念じて祈りをささげた当時の人々の心が、私たちに伝わってくる。

とくに悔まれるのは、盗掘のために棺蓋の一部が破壊されていたことや、豊富にあったと思われる副葬品が持ち去られていることである。いつ盗掘され、何回荒らされたかは不明である。

図28　玄室への首長の葬り方の想像図

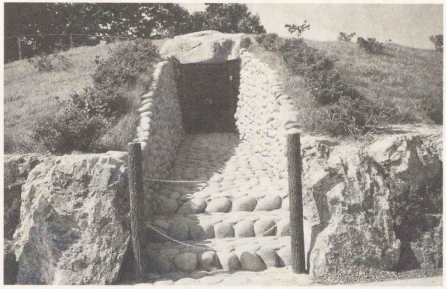


写真61　復元された古墳正面(前庭部)

羨道・前庭部・墓道・周濠

横穴石室は、死者を石室の側面から搬入する墓室である。死者を石室の主室である玄室への通路としての機能を果たしている。すなわち、羨道部は玄室と現世をつなぐ通路の役割を果たしているのである。

やや新しい段階になると、そこへ追葬が行われる場合もあるが、入り口は石をもって閉塞する行為の過程で、祭祀が行われた遺跡例もある。

羨道に続いて墳丘外へ姿をあらわす「前庭部」も死者搬入の一種の通路であるが、ここでは死者の霊の弔いと同時に、後継者が亡き首長の霊力をうけ、服従を誓う祭祀が行われたことが考えられている。

この横穴石室の普及にともなって、墳丘の頂上を中心とする祭祀から、羨道前面ないしは前庭部を中心とする祭祀への移行が指摘できる。このことは、墳丘の高さや大きさとの関係を薄め、やがて墳丘の巨大性の意味を次第に失わせる一因にもなっている。羨道にも、工人集団の慣習に従って技法の違いが認められているが、一般的には玄室幅に対して羨道幅との比率をみると、時代が降るに従ってその差は縮まるという傾向が知られている。本古墳の場合は、約九〇センチほどの差がある。

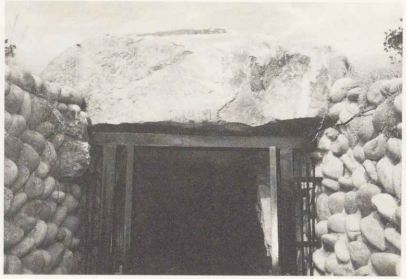


写真62　偉容を誇る石室入り口の羨門

玄室への入り口には、両側に高さ約一・三メートル(東側)と約一・八メートル(西側)の方柱状の立石が配置されており、その袖石の上には楣形状の楣門をのせ、天井が形成されている。

羨道は、その玄門から、石室入り口の羨門までゆるやかな上り坂で、道幅を約三〇センチほど広げながら、約五メートルの長さを有している。両側壁は高さ約一・八～一・三メートルの三個のチャート材の大石で基礎部を固め、その上に東側は九個ほど、西側は二〇個ほどの小さい山石を積み上げている。

さらに、羨道部への入り口には、大規模石室を象徴するかのように、長さ約二・六メートル・厚さ約八〇センチ・縦約九二センチの巨石である羨門が偉容を誇っている。床面から羨門までの高さは約二メートルほどあり、一番奥の玄門部の天井の高さ約一・六メートルと比較しても約四〇センチほど高くなっている。天井石も四枚のせ、羨道部をがっちりと立さいでおり、発掘時の折にはこのぼっかり口を開けた羨道も河原石で閉塞されていたことが確認されている。

羨道に続く前庭部は、羨門部より墳丘南端まで約一〇・メートルの下り坂で、約五〇センチほどの幅の広がりを示しながら伸びている。この部分の特徴は、両側壁が河原石で美しく積み並べられているのが特徴であり、装飾

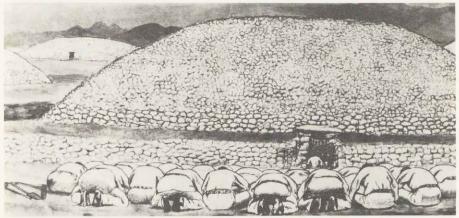


図29　前庭部での墓前祭のようす

的な意味も考えられる。両側壁に使用されている河原石は、長さ約二〇センチ―三〇センチ前後の横長の扁平な石で、羨門から墳丘端まで、整然と積み上げられている。床面の敷石は、羨門部から石室内部へ向かって施されているが、前庭部には全く認められず、石室と墳丘外部を明確に区分していたことが理解できる。

さらに、羨道端より一段下がって真南に一直線上に墓道が伸びていたが、十五メートルほどの長さまで検出された後、工事の関係で埋め戻されている。

古墳が存在する以上、私たちは柩[ひつぎ]が集落を出て古墳に至るまでには、死者とそれを見送る者の道を考えねばならないが、その一部が今回検出されたことも貴重なことである。墓道について広く考えると、次の四種類が考えられている。

① 根道＝集落から古墳群にたどりつく道で、最も大きくて距離も長く、時には現世の道である。

② 幹道＝根道から分かれ、古墳群にたどりつく道であり、墓域の中をいくつかの幅員をせばめた道である。

③ 枝道＝幹道から分かれ、いくつかの古墳を結ぶ道である。

④ 茎道＝枝道から分かれ、横穴式石室古墳に至る

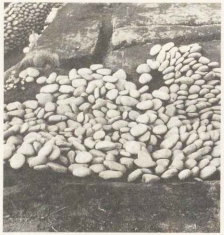


写真64　周濠端の河原石積み状況

写真63　周濠の発掘状況

道である。

今回、検出された墓道は、この分類でいくと茎道にあたるものと考えられる。

群集墳の場合、各古墳には何らかの形でこうした墓道が造られていたことが考えられ、各古墳は一基ず つ点として存在するのではなく、墓道によって相互に関連づけられていたものと思われる。

さらに、墳丘の周りには、幅約五メートルほどの周濠[しゅうごう]（空濠[からぼり]）が検出された。濠を掘ることは墳丘築造の最終段階になされ、その排土を使って、墳丘の表面をおおったと思われる。周濠の意味については、墳丘上の排水をよくするために用いられたが、同時に墳丘を周囲の外部環境から隔てる意味を付加したのではないかと考えられている。また、墳丘の表面が版築によって敷き固められていたかどうかは本古墳の場合不明であるが、一番自然の破壊を受けやすいところだけに、周濠内には、乾季の時期も一定の水を保ち、墳丘に一定の水分を供給して、版築の含水を一定に維持することにより、墳丘の表面の強さを確保する役割をもたせたことも考えられている。

そして、墓道によってたち割られた周濠の端には、多数の河原石が積まれていたことも本古墳のひとつの特徴であり、水止めと同時に、装飾的あるいは呪術的な意味をもたせていたのではと、推測される。

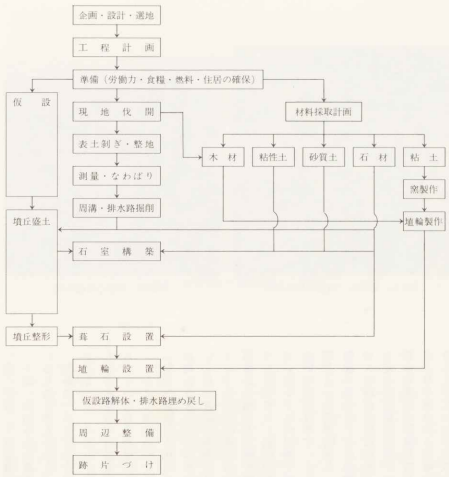


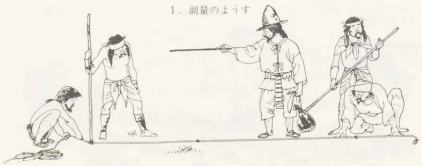
図30　古墳の施行順序

上図は、古墳の築造工程の一般的な作業順序を想定したものである。

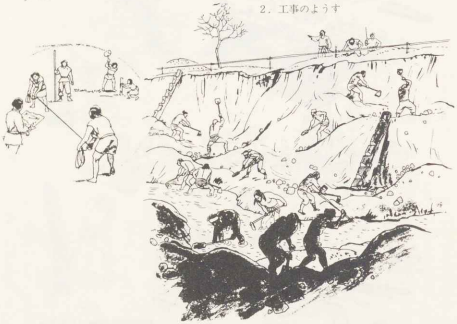
「大牧一号古墳」の場合も、設計図の作製、土砂の運搬、周濠の掘削、墳丘の造成、河原石の採取、石室用石材の運搬と架構、石棺の製作、人夫の徴集などさまざまな段階が考えられる。現代の私たちが考える以上に、当時の土木技術が進歩していたことに注目したい。

その大きな土木工事の様子を再現すると、次頁のような「想像図」を描くことができる。

1．測量のようす



2．工事のようす

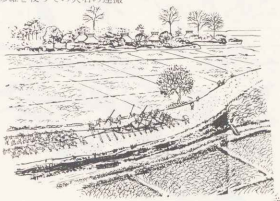


3．当時の道具

図31.①　古墳づくりの工事想像図

4．石の切り出しと川を
使っての搬送

5．修羅を使っての大石の運搬



6．工事のようす

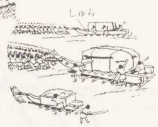


図31.②　石の切り出しと運搬

3．職人たち

1．古墳をつくる人たち

2．技術者たち

4．土を掘ったり運んだりする人たち

図31・③　当時の人々の姿

四　出土遺物

有力な首長墳と推定される石室の場合、大形の家形石棺が玄室のほぼ中央に置かれ、その卓越性を示しているが、本古墳を特徴づけるものに、被葬者が生前に着用、佩用していたものの一部である「副葬品」がある。すでに盗掘されていたので全容を明らかにすることはできないが、首長の権威を示す品々は豊富であり、後期古墳を特色づける鉄地金銅張りの馬具一式、武器や武具類としての鎧である挂甲の小札・矢を携帯するための胡簶・直刀・刀子・鉄鏃などがあり、須恵器では高杯・脚付短頸壺・平瓶・瓮・長頸壺・杯身・杯蓋・器台等が多数出土している。また装身具として、ガラス玉（丸玉）・銀製空玉・金環が発見されており、被葬者の生前の地位をしのばせている。

一般に副葬品は、遺体を安置した石棺内や石棺の周囲に納められているが、初期の品目である鏡類や玉類、碧玉製腕飾類、武器、武具などは宝器・祭器的性格を有し、被葬者が司祭者であることをうかがわせる。しかし、五世紀以降になると、日常用具・多種多様な武器・武具・馬具などが登場してくるようになり、被葬者は階層的な支配者としての地位を固め、自己の権威を誇示する性格に変化してくる。また、その背景には、朝鮮の諸技術の移入による手工業製品の飛躍的発展をみることができる。

横穴式の墓道を有する後期古墳になってくると、日用品の須恵器が多数出土し、器形も多種多様になってくる。このことは、本古墳の場合でもそれを裏づけている。須恵器は、主に飲食物が納められていたことを示しているが、参列者が共食によって死者の霊力を受けるという古墳成立時の儀式があっても、今までは死者に死後の飲食物を用意するという思想はなかった。したがって、本来、祖霊祭祀の場として成立した古墳の中に、家族霊の居所を見い出すようになったと思われる。また、刀類や武具類は近づくものを強くしりぞけ、示威のための威儀の具、神聖の表示的性格を有していたようである。

須恵器

古墳時代から平安朝時代にかけての時期に、大量に製作され使用された代表的な土器は、二種類ある。一つは、土師器と呼ばれる弥生式土器の伝統を引いている褐色を帯びた土器であり、もう一つは、須恵器と呼ばれるねずみ色を帯びた土器であり、四世紀末から五世紀の初めに南朝鮮から渡来した工人たちによって作られ始めた土器である。

土師器は、野天に穴を掘って八〇〇度程度で焼くのに対し、須恵器は山の斜面に掘り抜かれた傾斜をもった窯（幅一～二メートル・長さ七～一〇メートルの、トンネル式と半地下式窯の二種類がある）で、ろくろで作った器体を千

蓋がなく杯部のみの高杯で、口径が大きく開いており、脚部には一段透と二段透がみられる。本古墳から出土した完形の器は、器高約8.4～17.7cm、口径 8.5～17.5cmとさまざまな大きさである。

写真65　無蓋高杯

度～千二百度の環元焔焼成で製作するので、堅くて透水性も低い特徴がある。

須恵器の形は数十種にも及ぶが、古墳に副葬したり、祭祀に用いた土器はいずれも貯蔵、供膳、調理などの機能をもつ普通の須恵器が多く、そのためにだけ用いたとみられる器種はない。しかし、高杯と瓮に水や酒を注ぐのに用いるなど、祭祀用として最も多く用いられたようである。

本古墳から出土している器形の中には、脚部や口径部が長大化するとともに装飾化しているものが多く認められ、かなり円熟の域に達していることを示している。

各務原市北部の「稲田山古窯址群」は、美濃須恵古窯址群の一角を担うことで有名で、各務地区では早くは六世紀代に須恵器の生産が開始されていたと推測できる。したがって、当時の製作工人集団との関連や、この地域での消費も十分考えられる。

須恵器の需給関係をみると、農民の住居跡で主体をなす土器は土師器が多いことから、須恵器の生産機構は、その地域の支配者によって掌握されており、一般の農民には縁遠い土器であったことが指摘されている。

しかし、東海地方では、須恵器の生産地が多いこともあって、農民の住居址からも須恵器が数多く発見されており、農民の間にも一般化していたことがうかがえる。

写真67　脚付短頸壺

器高 約26cm　口径 約9cm

肩部に斜行ヘラ描文，体部にかすかな沈線とカキ目調整のあとがある。脚部は二段透で上部は三方，後段は四方についている。

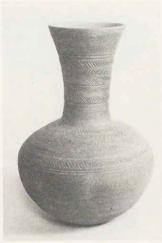


写真66　長頸壺

器高 約20.5cm　口径 約7.7cm

平行沈線文と斜行ヘラ描文が施してある。

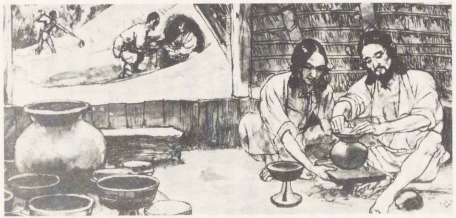


図32　須恵器作りの想像図

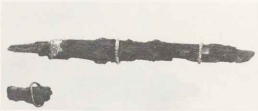


写真68　直　刀

全長約89cm，中央幅3cm，平棟平造りと思われる。

鞘におさめられていたため，鉄地金銅張りの飾具が4か所に認められる。

写真69　刀　子

刀子は3本出土している。それぞれ，全長約21cm，約20.5cm，約15cmである。刃幅は約1cm。

鉄製品

わが国における鉄器の生産開始は、弥生時代前期の後半にまでさかのぼることができる。しかし、当初、鉄器の素材は大陸や朝鮮からの舶載品（輸入品）に始まり、舶載の鉄製品からの鋼製造を経てから、国産砂鉄を原料とした製鉄へと発展するのは、六世紀ごろと推定されている。

古墳時代に入ってから、膨大な数の鉄器が埋納されるが、直刀などの鍛造技術の飛躍的進歩と同時に、古墳出土の鉄器は砂鉄ではなく、鉄鉱石（磁鉄鉱）を原料とした鋼が素材となってきている。

本古墳からの「鉄製品」としては、直刀・刀子・鉄鏃・鉾の先端部・挂甲と呼ばれる鎧・そして鉄地金銅張り馬具類が出土している。

全国的にみても、横穴式石室の中心的な副葬品では、直刀・刀子・鉄鏃の三者が極めて多い傾向を示している。後述するが、馬具類は、古墳後期の特徴的副葬品である。

中でも直刀は、首長の最も権威的なものであり、刀子はナイフであって、「常に佩用して食事にも雑用にも用いられる」と考えられており、常に身辺に保持されていたようである。しかし、副葬した刀子の多くは棺内から発見されており、工具としての刀子と、武器であり魔除けとして呪術的な意味をもたせた刀子とは、区分されていたようである。六、七世紀の古墳群の被葬者は、攻撃

図33　挂甲　群馬県九合村出土の埴輪

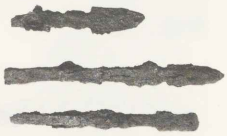


写真70　鉄　鏃

長さ　約17cm，17.5cm，19cm
鏃身　約2.5cm，3cm，2.5cm

用武器としての鉄鏃と、防御用武器としての刀子を象徴的に副葬したのであろう。それ以上に、刀を副葬し得たのはより限られた人であり、馬具はさらに限定されたんとどとらえることができる。このことからも金銅張りの装具をつけた鉄刀をもち、馬具類一式をもつ大牧の首長の階層は、かなり高いことが推定できる。橿原考古学研究所の石野博信先生の群集墳調査記録をみると、馬具をもつ階層は二〇基中に一基であり、刀を持つ比率は一〇パーセント余との報告がある。

鉄鏃は、三本発見されているが、矢入れのまま副葬されたようである。本古墳より出土した鉄鏃は、長頸鏃の型のもので、鏃身の柄が長くなってきている。鏃身が小さくて総い細根式は、五世紀中頃に現われてくる新型のものである。短頸鏃は、五世紀後半には姿を消している。本古墳より出土している鏃の柄はまだ太いので、飛翔力より、傷口を大きくするのが特徴である。この鏃から推定すると、弓の長さは二メートル前後であり、矢の長さは八〇センチ前後

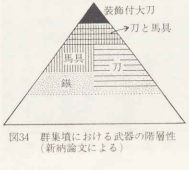


図34　群集墳における武器の階層性
（新納論文による）

写真71　挂甲　高さ1m，5世紀，大阪府長持山古墳より出土

革綴短甲・七観古墳

三角板鉄留襟付短甲・黒姫山古墳

図35　短　甲

「竹製の矢柄」と想像できる。なお、矢を入れて携帯する籙も、歩兵戦用には肩に負う大型の歩籙でよかったが、騎兵用には腰に下げる小さい「胡籙」の形式を有利とした。その胡籙が本古墳より出土している。

さらに、本古墳より出土した埴輪の形式は、五世紀中頃に出現し、六、七世紀の古墳から多く出土する「挂甲」という鎧があり大変貴重なものである。

鉄製甲冑は、弓矢の発達とともに、古墳時代の防御用具において中心的なものである。甲には、短甲と挂甲とがあるが、短甲とは右上図のように鉄板を革紐で綴じ合わせるものと、鉄鎧で留めるものとがある。この短甲は歩兵戦用のものであったから、直立した姿勢では胴から大腿部までおおえたが、馬上で用いるには動作の敏活さを妨げるのみでなく、草摺（下に垂れている箇所）の構造が不適当で、騎乗者の腰から下を露出させる欠陥があった。したがって、これを騎兵用の挂甲に変えなければならなかった。

挂甲は、写真でも分かるように腰の位置にあたる特有な湾曲をもった小札を含め、数種類の小札を革紐で綴じたもので、短甲に比べて動きやすく、小札の重なり具合から防御面でも秀れていた。長さ約五センチ、幅約二センチほどの小孔のあいた長方形の小札が、八〇〇個ほど出土している。騎兵装備の採用は注目したいことである。

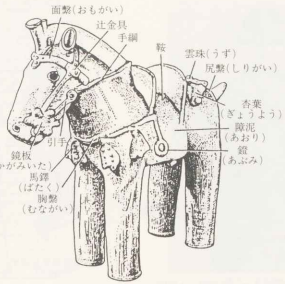


図36　馬具一式を装備した馬形埴輪

馬具類

江上波夫氏〔民俗学研究」一三一三、一九四九年〕によると、前期古墳の副葬品は実用的というより、むしろ宝器的・呪術的意味をもったものが多く、農耕的であるのに対して、五世紀以後の後期古墳文化は、武器や武具とか服装品などの大陸的な要素を基本的なものとする騎馬民族的性格を示しているという。その変化が急激に起こっており、これは東北アジアの戦闘的な騎馬民族が、武力をもって日本を征服したために生じた証であるという。この江上説に対しては多くの反論が加えられているが、四世紀末から五世紀にかけて、遺物の種類や型式に大きな変化や差異がみられることは確かである。

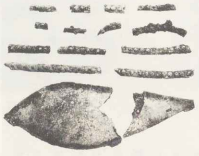
首長の権威を表現するために特別な装具をもち、またそれを飾ることの最たるもののひとつに、乗馬の風を示す「馬具」がある。きらびやかな金銅ないしは鉄地金銅張りの馬具類の副葬は、馬具類を装備した乗馬による日常的な権威を示すものであり、集団成員との格差を自他ともに決定的に印象づける特権的な効果を表現するものであったといえる。

一口に馬具といっても、用途に応じてそれぞれの装具があり、大別すると、① 馬を制御するために必要な装具で、轡とそれに着用する面繋と手綱とから成り立つ② 騎手の安定を保つための鞍で、発達した形では胸繋、

尻繋、障泥がつき、さらに足を懸ける鐙が加わる ③ 装飾的目的が付加されるもので、胸繋・尻繋に杏葉・馬鈴・馬鐸がつき、尻繋には雲珠がつけられる、となる。

本古墳からは、馬具一式が出土しているが、馬具としては、鉄地金銅張りの、一段と進歩した技法を有している。轡は、鉄製環状の楕円形の鏡板をもち、轡につながる銅張りの辻金具、さらに鞍の部品である磯金具、飾り物である杏葉、雲珠などが出土している。雲珠の表面は、銀象嵌（彫金技法のひとつで、線状を以て文様を現わし、銀の色沢を応用している）を施しており、いずれも豪華なものである。

1．轡



2．磯　金　具（金銅張り）

3．杏葉（金銅張り，横約10.3cm，縦 9.8cm）

写真72　馬　具　類

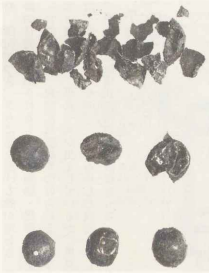


写真74　銀製の空玉

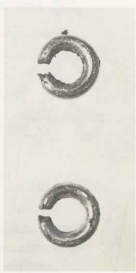


写真73　金　環（径 1.8cm）

装身具

古墳時代の「装身具」は、発生的にみてもその起源は、社会的地位や権威などの表示や呪術的な目的のために始まり、美しく見せるための用具として身体を飾るという意識は、後出で付帯的であったといわれている。

しかし、本古墳のように後期古墳になると、わが国独特の硬玉[1]の勾玉[2]から、碧玉[3]製・滑石[4]製、さらに瑪瑙[5]製の勾玉が主流をなすと同時に、使用する材料の制約が一段とゆるみ、着用することのできる人々の社会的階層も広範囲になっていき、身を飾る飾り玉、飾玉化へ大きく転換してくる時期である。

本古墳からは、首飾りを構成するいろいろな玉がある中で、「小玉」というアルカリ石灰ガラスで、銅の他にコバルト・鉄などを発色剤として利用することにより、淡青色・黄・緑・赤褐・紫褐など、色彩に富んだ玉が多数出土している。勾玉や管玉・切子玉・トンボ玉などは発見されていないが、貴重なものとして銀製の空玉[6]（中が空洞）が数点出土している。

これらの首飾りを構成する玉は、普通は紐[7]でつながれているが、紐は腐り消滅しているので、つながりの状態は明らかではない。埴輪の表現を見ると一重か二重で短く巻きつける場合、やや垂らした場合とがある。

これらの玉作りの遺跡は、全国的にみても須恵器生産

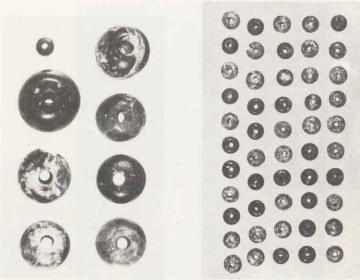


写真75　ガラス製の丸玉（径1～2cm）

地と異なり、余り知られていないのが実情である。本古墳の場合、おそらくは他の武器・武具類と同様に大和朝廷やその周辺から、各地の首長に配布された権威を象徴するひとつの価値ある品物であったと思われる。

また、本古墳より径一・八センチの小金環が二個発見（二号墳よりも、二個出土）されている。

このような副葬品からもわかるように、光り輝く金・銀の愛用、多彩な玉類の着用、馬を財物として誇示するための装飾本位の金銅張りの馬具セットは、明らかに、前期古墳時代と比べ、首長の性格の変化を表現している。

すなわち、集団と一体であった呪術的権威とは、かけはなれて、自らの実力をきらびやかな世俗的権威を示す装具でまとうことによって、その地位を絶対化したものと考えられる。したがって、呪力のもつ比重は相対的に低下してきていることを示している。

したがって、長頸の鉄鏃、騎馬用の胡簶や挂甲などからは、六世紀末の時期に、大牧一号古墳の首長は、最新式の武器を装備し、騎馬を行い、各務原一帯の原野を配下を率いてかけていた勇姿を思い浮かべることができる。

なお、本古墳より出土した主な副葬品は、市保健文化会館内、一所加桜町の「歴史民俗資料館」に展示し、一般に公開されている。

(五) 被葬者と農民のくらし

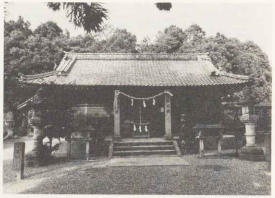
図37　首長の想像図

日本列島に残されている古墳の総数は、一五万基以上といわれている。おそらくその九九パーセントは、六世紀以降のおよそ百年の間に集中的に築かれた新しい古墳であるともいわれている。しかも、これらの新しい古墳の大多数は、直径一〇メートル内外という小規模な円墳で、狭い範囲に一〇基～三、四〇〇基が密集して築かれている群集墳である。四、五世紀に築かれた首長墓とは性格や内容が大きく異なってきていることは、前述のとおりである。横穴石室は、死者の追葬も可能であるから、約百年ほどの間に十数万の人が群集墳に眠っていると推定できる。とすると、とても首長や支配者のみのための墓とはいえなくなっている。

しかし、それだけの人数は約一〇〇年という長い年月をかけて葬られた結果であるから、多いといってもすべての人々の墓所だと考えることもできない。

やはり、ムラの有力者とその家族くらいまでの人が、群集墳に関わったとみることができる。生産力を向上させ、力をつけてきた農民の成長をうかがうことができる。

このような時代的な背景の中にあって、大牧一号古墳の場合は、周囲の小円墳と比較して最大規模の大形の円墳であることは、近隣にある大伊木古墳、ふな塚古墳と合わせて、この地域で最有力の首長系列の墳墓として考えることができる。



神社の西側裏山には、村国氏と関係のある豪族の小円墳が保存されている。

写真76　村国神社と村国古墳公園

それでは、本古墳の場合の被葬者は「だれか」の疑問が当然起こる。しかし、現在一番明らかであるはずの大王の陵墓古墳でさえ学問的に証明できるものは極めて少ないだけに、地方の古墳に葬られた人が一体だれであるかを知るのは、ほとんど不可能だということになる。

強いて各務原市の文献にみられる歴史上の人物と結びつけるならば、本古墳が築造された年代より百年後に起こる六七三年の「壬申の乱」で活躍した「椋部(むくべ)男依」の祖先である。先述のウヌ勢力のところでも触れたように、村国氏は、天智天皇の死後、天皇の弟である大海人皇子と、子どもの大友皇子の皇位継承をめぐる内乱で、美濃の豪族たちと協力して兵数万を率いて大海人皇子の味方をし、近江朝廷を破る大きな戦功をあげたことで有名である。その功績で男依は、外小紫位(冠位十九階の第六等、中央の中級官吏)を贈られている人物である。

この村国氏の拠点は、木曽川をはさんで美濃の村国真(ま)墨田神社(鵜沼山崎町)、村国神社(各務おがせ町)、尾張一の宮の村国真墨田神社が存在することから、豪族村国氏は木曽川の両岸を勢力範囲とし、村国郷を形成していたことが明らかである。

したがって、それより一〇〇年ほど前の大牧一帯を結びつけることはあくまでも推測であるが、この村国氏の祖先、あるいは村国氏一族、または村国氏を支える有力

図38　農村の想像図

部族長が葬られていると考えると、大牧一号古墳を日本史との接点でみいだすことができる。

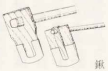
次に、群集墳を造るだけの力をそなえてきた当時の農民の生活のようすについて触れたい。

五世紀の後半になると、農民たちは、鉄製の鋤や鍬が各農家に広く使われるようになり、とくにU字型鍬先や曲刃鎌と呼ばれるすぐれた農具がいきわたり、土地の開発は一層進んだようである。

当時の農村の集落跡を発掘した各地の報告書をみると、古墳時代の住居は、縄文時代以来の竪穴住居が中心であり、弥生時代からの連続でありながら、古墳時代に入る頃には全国的に、その平面図形が隅丸方形（小判形）から、隅がわずかに丸い程度の方形竪穴住居に変化している。屋根も寄棟式という四角錐形になってきており、カヤぶきである。

古墳中期になると、従来の炉にかわって効率のよいカマドが設けられ、

鋤



鍬

図39　竪穴住居内部の想像図

始める。そのカマドが全国的に一般化するのは、古墳後期に入ってからといわれている。

さらに、古墳後期に属する竪穴住居の特色は、規格化の進行である。竪穴の大小にかかわらず方形であり、その対角線上に四本の主柱穴をもち、北もしくは東壁中央に設けられたカマド、そしてそのかたわらに掘り込まれた貯蔵穴というのがひとつのパターンで、竪穴ごとのばらつきがなくなってきている。

写真77　カマドを有する竪穴とカマドのアップ

しかし、首長層の家は一般の農民のそれとは異なり、宮内庁書陵部に保管されている家屋文鏡や、各地から出土している埴輪家からみると、かなり立派なものであり、左資料からも容易に理解できると思う。それぞれ、機能や構造を異にする建物であるが、首長層の住居を表現しているものばかりである。

当時の農村の住居群からは、多種類の建物を配置する首長の屋敷とは別に、一般の農家の竪穴住居が、四、五軒～十数軒が固まっていることから、これらは家父長を中心にまとまった血縁の大家族の家跡と考えることができる。一軒の家には夫婦を中心にして、二、三人から四、五人が寝起きし、それぞれの家族は親戚関係であり、農作業や農地の開拓、家の建築など、すべて家父長の指図によって行われていたと思われる。

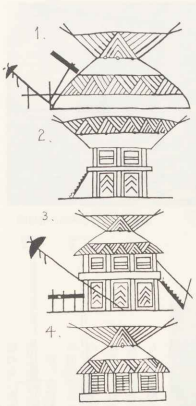


図40　家屋文鏡にえがかれた4種の建物

こうして農民は、生産活動に励み、有力農民は次第に生活を向上させ、実力をつけ、家父長層やその近親者を葬るために、大家族の働き手が力を合わせ、小さい古墳ぐらいは造れるまでに成長してきた。

各地で発見されている埴輪の農民の表情は、明るく伸び伸びしているものが多いことからも、豊かな生活を切り開いている農民のおおらかな生活をうかがうことができる。

しかし、首長墓築造には、首長の支配下にあったこれらの農民が、大規模な土木工事の人夫として徴発され大きな負担となった。どれだけ徴発できるかが、首長の政治力、経済力、支配力の反映であった。

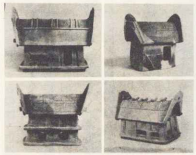


写真78　群馬県赤堀茶臼山古墳の埴輪家

第五章　結語

「古墳時代」や「古墳文化」については、開始の時期を初め、古墳の立地、築造技術、技術者、祭祀・儀礼などについて、さまざまな論議があり、考古学上からも未解決の問題がたくさん残されている。

しかし、古墳時代を象徴する「古墳」は、単なる墓ではなく、当時の政治的・経済的・社会的・文化的記念物としてとらえるならば、三世紀後半から七世紀のひとつの時代のあらゆる野の歴史を解く鍵を秘める重要な価値あるものと考えることができる。

特に、この時代は、ちょうど古事記や日本書紀がとり扱っている時代でもある。日本書紀の「崇神紀」にまつわる伝承には、「昼は人が造り、夜は神が造った」こと、さらに大坂山の石を「人民相踵ぎて、手逓伝にして運んだ」ことが伝えられている。これは、古墳の築造は神が助力を与える神聖な行為と考えられていたこと、さらにそれは共同体の成員が集団で参加すべき行為と考えられていたことを示している。さらに、「日本武尊命の三つの白鳥陵の伝承、百舌鳥野の仁徳陵の造営に際して、鹿ノ野の中から走り出して役民の中に入って伏れ死に、人々があやしんでそのきずをさがしたところ、その耳から百舌鳥が飛び去ったという地名起源説がみられる。これは、土地の精霊としての鹿を屈服させる大王の絶対的な力を裏づけている。これらのことが伝承であっても、初期の古墳がもっていた共同体の集団祭祀行為の考え方を表現しており、大王の成長のステップをうかがうことができる。

このような古墳造営は、中期古墳から後期古墳へと変化する中で、七世紀前半における蘇我馬子の桃源墓の造営に際しても、日本書紀に「蘇我氏の諸族等悉に集いて、嶋大臣の為に墓を造りて、墓所に次れり」とあるように、一族の祭祀としての古墳造りは、終末期の古墳にまで及んでいることを物語っている。

日本史的にとらえるならば、三世紀後半、近畿地方を中心に、特異な形をした大きな墳墓が出現してくる。前方後円墳と呼ばれるこの権力者の墓は、四世紀末までに北九州から東北地方南部に至る全国各地に広がり、五世紀に入ると、応神・仁徳陵にみられるような世界最大級の巨大古墳になる。

いずれもが、古代豪族と大和朝廷の発生と成長を象徴するできごとであり、これらの古墳のうつりかわりをたどると、そのうちに小国家に分立していた日本が、まだ河内王朝、ついで大和王朝を中心とした統一国家へと統合されていく壮大なドラマが浮かびあがってくる。

民衆の指導者であった首長が、農民の支配者に変わっていく見取りを示す謎めいた文様の鏡、玉、いかめしい武器や武具、馬具、そして黄金の冠、さまざまな装飾品が出土している。

また、この時代に生きた人々の証である大規模なかんがい用水や堰の構築や、そして朝鮮や中国との交渉を通してもたらされた初歩的な技術や工芸品の数々など、東アジアの辺境であったわが国が、世界史の舞台に登場する国家形成期という激動の時代でもある。

したがって、本冊子の内容としては、単に本校に現状保存されている大牧一号古墳の紹介や解説に終わらないために、広く紹介されている通説に基いて、できるだけ考古資料を採用し、活用することによって、古墳時代史を私たちなりに構成しなおし、日本の古墳と郷土の古墳を考えながら、「大牧一号古墳」を位置づけてみた。

そこで、本冊子では大きく三部に分けて記述した。

第一章では日本の古墳時代をさまざまな角度からひとつの流動する時代としてとらえ、まず古墳発生の歴史的背景に触れ、ついで古墳の変化と特徴を概説することによって、古墳時代のアウトラインを描きだした。

第二、第三章では、郷土社会が大和朝廷との国家統一と密接な関連をもちながら、美濃にクニグニが成立し、地方豪族が活躍し、各地に古墳を築造し始めた姿や動きを概説するとともに、県下と市内の主要古墳を紹介した。ここでは、大和の大王を頂点に、全国的規模で結ばれた政治的な連携のネットワークに組み込まれていった郷土の姿をみることができる。

さらに、首長墓として出発した古墳が、六世紀に入り、葬られる人々の社会的地位や立場が大きく変り始め、各地の有力な家父長層まで古墳を造るようになり急激に小円墳の集合である群集墳が各地に現われてくる。

そのような時代の動きと変化を背景にもちながら築造されたのが、**第四章**の「大牧一号古墳」である。

しかし、地域に群在する小円墳の中にあって、本古墳は六世紀末の円墳としては巨石を用いた大規模な横穴式石室墓であり、大形の家型石棺の発見や豊富な副葬品等から、この地域一帯の最有力の首長の墓であると考えられる。

周囲に横穴式石室墓の単位群が広範に出現していることを物語っている。こうした周辺の安定度と統率力をもった地域の最有力首長が、その支配力や財力、技術力、農民動員力を発揮して、先代の首長の霊をとむらい、支配権の授受の証としての墓づくりを行ったものと考えることができる。古墳の築造は、次代の首長と社会にとって極めて政治的色彩の濃いものであり、祭祀・儀礼と一体

的なものであったことにも目を向けなければならない。このような意味のある大牧一号古墳の特徴的なことがらをまとめると、次の諸点があげられる。

① 遺構や遺物が示す年代からすると、本古墳の築造は、六世紀末の古墳時代後期のものと考えられる。横穴式石室の玄室は大きくて広く、羨道部・前庭部・墓道・周濠の各部を有する横穴式墓築造の典型的な円墳である。同時期の小円墳と比較して格段に立派である。玄室中央には、大形で精巧な組み合わせ式家形石棺がほぼ完全な形で安置されていることが、本古墳の価値を一層高めている。

副葬品についても、盗掘により大部分が持ち出されているにもかかわらず、そこから発見された品々の種類や質とに豊富で貴重なものばかりである。世俗的権威を表現する金銅製の馬具一式、刀類、鏡、馬用の挂甲の甲冑、長頸の鉄鏃と矢を入れる胡籙、さらに金・銀・ガラス製の各種装身具、飲食物供献の装飾付須恵器など、首長の生前の日常を反映して、この地域一帯の最強の首長の古墳であると考えることができる。

② 古墳の築造法は、基盤になる土層を掘り込み土擴内に石を積み上げたもので、側壁は土擴壁が支えている。その上に天井石をのせて石室を構築しており、築造場所や工法は、実に合理的に工夫されて築造されている。さらに羨道部・前庭部の構築は、玄室と各部が明確に区分されており、それぞれ計算して石材の選択・石積みがなされている。玄室を初め各部の平面、空間の広がり、通路の上下の傾斜、石の選択と組み合わせ、配置など、全体と部分の形状など、構築技術の計画性と綿密さをうかがうことができる。特に、千四百年も経過しているにかかわらず、ほとんど石の移動や転落がみられない堅固さは、土木技術の高さを物語っている。床面のすぐ下は、岩盤になっており、石室を築造するのに岩盤まで掘り下げてから石を構築している工人たちの知恵が、現在にまで完全な形で保存されてきたのである。

③ 本市に約六〇〇基ほどあった古墳の中にあって、本古墳各所に、木曽川の河原石をふんだんに利用していることも大きな特徴である。特に、大牧一帯の古墳は大量の河原石を石室や羨道、さらに、葺石や敷石に活用している。本古墳においても、石室や羨道の床面には、すべて河原石をきれいに敷きつめている。前庭部の両側壁、さらに羨道部や玄室の両側壁の間隙に詰石として大小の河原石を利用している。河原石は、周濠や墓道にも認められ、外見的な面の装飾性と、構造的な機能を河原石に求めることを見つけねばならない。過去の私たちの生活は、文化財を残してくれた先人の生活の延長線に成り立っており、文化財を通して過去を理解することが、現在そして未来を築く糧になるものと考える。

文化財は「歴史の生きた証」であるという。その形や大きさ、文様のひとつひとつが、当時の人々の生活やものの見方、考え方を今に伝えてくれる。大牧一号古墳然りである。

現在、県下の埋蔵文化財は、およそ六五〇〇か所に眠っているといわれている。めざましい最近の開発の中にあって、消滅速度を増していることは極めて残念なことであるが、自然環境の保護とともに、文化財に刻まれた生活の跡を尊重する心や風土がより高まり、強まることを願って結語としたい。

各務原市民憲章の第一番に、「自然と文化財を守り、美しいまちをつくります」が謳われている。大牧一号古墳の存在が、温もりと安らぎのあるふるさとづくりのひとつのエネルギーになることを確信するとともに、現代に生きるものとして、これを後世に伝えなければならない責務を強く感じる。

ができる。

④ 本古墳は、丘陵上の最高所に築かれ、眼下に木曽川を見下ろしている。同時期の均質的な小規模な円墳群の中にあって、その立地や規模はともに特異である。したがって、西隣りのふな塚古墳とともに、この地域の古墳群全体を統一する共同体的な首長墓とみることができる。その勢力範囲も、木曽川対岸の現在の大山市から扶桑町、江南市一帯と何らかのつながりがあったと推定できる。

このような特徴をもつ「大牧一号古墳」が、昭和五十九年に開校した陵南小学校に現状保存され、広く一般に公開されていることにより、本古墳への地域内外の関心は高く、注目を集めている。今回の冊子刊行により、すこしでも多くの方々に、郷土の歴史や文化遺産を理解していただくことは、そのまま郷土に対する愛情と責任を高めることにつながると考えたい。全国的にも、考古学や古代史の分野で、全国民を沸きたたせるような発見が多くあり、まさに考古学・古代史ラッシュといえる状況の中にあって、ここに大牧一号古墳という新たな文化財の出現により、郷土の歴史を私たちなりに構想し、解明することは、私たちの遠い祖先と、現代を結ぶ太い糸がまた一本ふえたことである。そこに先人の心を心としてうけとめ、輝かしい未来と希望のある郷土づくりの指針

このシンボルマークは、日本建築において最も重要な要素である枓栱（柱の上の横木を支える四角の材木）のイメージを表わしている。これを三つ重ねることによって、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたって永遠に伝承して行く文化財愛護の精神を象徴したもので文化庁が定めたものである。

挿入図版出典一覧

写真

1	「日本の歴史」	家永三郎	ほるぷ出版
2	「日本の誕生」（日本の歴史シリーズ1）		世界文化社
3	「歴史の学習ハンドブック」本間敏弘 学		研
4	「要説日本史」	横田健一	創元社
5	「歴史の学習ハンドブック」本間敏弘 学		研
6	「日本の誕生」（日本の歴史シリーズ1）		世界文化社
7～10	「古代史発掘⑥・古墳と国家の成り立ち」	小野山節	講談社
11	「日本の歴史」	家永三郎	ほるぷ出版
12	「日本の国のなりたち」	甘粕健	至誠堂
13	「日本の歴史」	家永三郎	ほるぷ出版
14～15	「岐阜県史」（通史編・原始）		
16	「古代史発掘⑧・装飾古墳と文様」	乙益重隆	講談社
17～18	「岐阜市史」（史料編・考古・文化財）		
19～25	「岐阜県史」（通史編・原始）		
26～28	「各務原市史」（考古編）		
29	（学校撮影）		
30～38	「各務原市史」（考古編）		
39～40	「鵜沼の歴史」	吉岡 勲	鵜沼の歴史刊行会
41～44	各務原市教育委員会提供		
45	「各務原市史」（考古編）		
46～54	各務原市教育委員会提供		
55～57	（学校撮影）		
58～59	各務原市教育委員会提供		
60～62	（学校撮影）		
63～70	各務原市教育委員会提供		
71	「古代史発掘⑥・古墳と国家の成り立ち」	小野山節	講談社
72～75	各務原市教育委員会提供		
76	（学校撮影）		
77～78	「古墳時代の知識」	岩崎卓也	東京美術

図

1～2	「日本の歴史」	家永三郎	ほるぷ出版
3	「チャート式シリーズ・新日本史」		数研出版
4	「歴史の学習ハンドブック」本間敏弘 学		研

5 「日本の国のなりたち」 甘粕 健 至誠堂
6 「岐阜県史」〔通史編・原始〕
7～8 中日新聞記事―「ぎふの古墳時代」より
9 「岐阜県の歴史」 中野効四郎
10 中日新聞記事―「ぎふの古墳時代」より
11 「岐阜市史」〔通史編・原始・古代・中世〕
12 「各務原市史」〔考古編〕
13 「各務原市史」〔考古編〕の資料に加筆
14 「那加町史」〔小林義慈〕の資料に加筆
15 「各務原市史」〔考古編〕に基いて作成
16～17 「鵜沼の歴史」 吉岡 勲 鵜沼の歴史刊行会
18～20 「郷土研究資料」昭和八年第二号 岐阜師範学校・小川 栄一
21 「鵜沼の歴史」 吉岡 勲 鵜沼の歴史刊行会
22 「各務原市史」〔考古編〕
23～24 「岐阜史学」昭和六〇年・第七九号
25～26 「季刊・考古学」第三号・一九八三年 雄山閣出版
27 各務原市教育委員会提供
28 「歴史の学習ハンドブック」本間敏弘 学研
29 「日本の国のなりたち」 甘粕 健 至誠堂
30 「季刊・考古学」第三号・一九八三年 雄山閣出版
31 「巨大古墳」 森 浩 草思社
32 「日本の国のなりたち」 甘粕 健 至誠堂
33 「古墳の話」 小林行雄 岩波書店
34 「季刊・考古学」第八号・一九八四年 雄山閣出版
35 「古代史発掘⑥古墳と国家の成り立ち」 小野山節 講談社
36 「日本考古学V」「馬具」 増田精一 河出書房
37 「日本の国のなりたち」 甘粕 健 至誠堂
38 「巨大古墳」 森 浩 草思社
39 「日本の国のなりたち」 甘粕 健 至誠堂
40 「古墳時代の知識」 岩崎卓也 東京美術

（表）

2 「日本史」 桐山一隆 三省堂
4 「要説 日本史」 横田健一 創元社
5 「古墳の謎」 晩教育出版
6 「岐阜県史」〔通史編・原始〕
7 「各務原市史」〔考古編〕

あとがき

私たちの陵南小学校は、昭和五十九年に開校したばかりの新しい学校です。本校は開校当初よりすばらしい教育環境に恵まれていました。

そのひとつは、名勝各務富士（伊木山）と木曽川の美しい景観とともに、四季折々の変化を見せる豊かな自然環境に包まれていること、もうひとつは、遠い祖先と私たちをつなぐ貴重な古墳が、学校の入り口に保存されていることです。

したがって、私たちは、これらのすばらしい教育条件をいかに活用し、創意ある教育活動と結びつけるかの課題をもってスタートしました。また、地域のよさや特徴を生かし、地域に密着した「ふるさと学習」を大切にすることは、今日的課題でもあった。

そこで、開校初年度より、教育課程の中へ地域の自然と古墳（大牧一号古墳）を積極的にとり入れ、成果をあげるよう努めてきました。

特に、古墳を通して先人に学び、現代における生き方を考えながら未来に希望をつなぎ、祖先を敬愛し、郷土愛や人間愛を育て、これに尽く心を培うことは、本校の教育目標「やさしい心でたくましく陵南を誇りに思う子」の育成に直結するものといえます。

そして、具体的な実践活動のめあてとしてかかげたのが、「誇りのもてる事実づくり――宝物づくり」の合い言葉であり、それをやる気と確かな実践へのエネルギー源としてきました。

このように、本校の教育活動そのものを特色づけ、方向づけている大牧一号古墳について、まず私たちが知識をもたねばと、全職員が初年度手作りで作成したのが、校内資料「古墳は語る」の小冊子であり、児童用のための「古墳てなあに」の読み物です。

その反響が大きく、二年次にして今回、教育出版文化協会より、「古墳は語る――大牧一号古墳」の冊子を発刊できますことは、本校草創期における画期的な「宝物づくり」といえます。

内容的には、ささやかな調査結果ですが、これを一応のまとめとして、より多くの方々に読んでいただくことにより、郷土への関心と愛着心を高め、温かい心が通じ合う地域の連帯感を強めることに役立てば幸いです。

私たちの研究不足のため、内容的に、不十分なところや事実解釈に誤まりのある点、不統一なところが多々あると思います。お気づきのことは、これからご指摘、ご指導いただいて、さらに充実したものにしていきたいと考えていますので、よろしくお願いします。

「古墳は語る」
―大牧一号古墳―

昭和六十一年三月一日発行

発行・各務原市立陵南小学校
電話(〇五八三)七〇―二二一一

編集・執筆／職員一同

山腰時安　藤島孝枝
野村和治　加藤千可子
後藤宏一　林　祐子
巌　義勝　平野美恵子
中村きわ　後藤由人
松尾美由紀　東方悦子
松岡恵美子　若山信彦
福井俊也　鈴木久美子

榊原嘉孝　岩田かよ子
清水孝子　湯浅由香利
白木征雄　篭橋ちほ
森　みどり　若山純子
水野満智子　高野道子
堀部好彦　島崎登志子
林　順子　中村ちづ子
田島康男　足立かよ子
小林宏行　清水先子

発行所　教育出版文化協会
岐阜市柳ヶ瀬通七―三
電話(〇五八二)六三―八九五五

印刷製本　株式会社　太洋社

写真協力　小川スタジオ
各務原市鵜沼各務原町二―二九九

〔 凡例 〕

- 田中山道と古墳をたずねて
- 歴史のあけぼの―炉畑遺跡をたずねて―
- めぐまれた自然と各務の舞台をたずねて
- 伝説の地をたずねて
- 国・県・市指定の文化財をたずねて

各務原市図書館
110011988

5

頒価　1000円